
シャイニング・クインテット

柊姫 呉羽

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

シャイニング・クインテット

【Nコード】

N4384K

【作者名】

柊姫 呉羽

【あらすじ】

春から高校生となった星野柚奈。頭脳明晰でしっかり者、またそのはっちゃけた性格でいつもクラスの人気者。

だけど本当はそんなじゃない。

隠れた自分をひきずりながら、帰国子女の美依や超美形の桐達と過ごすうちに何かが変わってくる。

恋愛、コメディ、シリアス、青春、友情、何でもありの学園ストーリー。

第1話

入学式

4月10日。

今日は始業式。

ほしのゆな
星野柚奈。16歳。

私は今日から、高校生になる。
はな
華の高校生に。

「え、コレ紙見ずに言うの？」

担任から告げられた一言に、柚奈は呆然とした。

本日の入学式で、柚奈は新入生代表の挨拶をしなければならなかった。

しっかり準備していた台本を、あっけなく拒否された。

今日この日のためにしっかり練習してきた、なんて事はなく、台本読めばいいだけだと思っていた柚奈は入学初日にして大ピンチを迎えた。

「うーわー」

口を押さえてため息をつく。

もうすでに体育館の前に新入生は全員並び終えており、あとは時が来るのを待つだけだった。

入場しながら覚えるとも言っのか。

当然、無理な話だ。

「・・・・・・・・」

ふと、隣の子の視線に気づく。

柚奈はちょうど出席番号が真ん中だったので、二列で並ぶと右の列の1番前になる。

隣にいる出席番号が1番最初の見知らぬ女の子がじっとこちらを見上げていた。

柚奈はまあまあ背が高い。

身長は168だ。

その子はここに並んでいる事から同じ年なのだろうが、背が低い。顔も少し幼くて、正直とても高校生には見えない。

見ようによつては小学生にも見えるほどだ。

身長は見た感じからすると150ちよつとなのではなからうか。

しばらく目が合う。

至近距離で目が合つてはいるのに互いにしゃべらない気まずい空気。耐えられなくなった柚奈は口を開いた。

「えっと・・・・・・・・どこ中？私は天城中。すぐその天城ヶ丘中学あまきがおか校」

すると、真顔のままその女の子は首をかしげた。

「・・・・・・・・ドコチュウ？」

女の子は眉間にシワを寄せる。

再び止まる二人の時間。

するとその時、担任が大きな声を出したのでみな私語をやめ静寂が訪れた。

正直、ほっとした。

このまま会話が續かず沈黙のままではさすがに耐え切れない。
というか、そういえば柚奈はそれどころではなかったのだった。

「いやー、すまん。星野。今年の1年はしつかりしてますから台
本なしでもいけますよって教頭先生に言っちゃったんだよねー」

親父のくせにてへつと笑う担任の赤田先生。

どうみてもごつい体育会系なのに担当の教科が日本史というこのギ
ヤップに初日早々笑いをとった結構ベテランの先生。
代々生徒の間で伝わるあだ名は赤^{あか}センらしい。

「ホント迷惑ですよ、赤セン」

「わ、早速つかったな！俺のあだ名！やー照れるなーそんなナチュ
ラルに使われるとー」

はははと口を大きく開け、胸を反らして笑う姿はまさしく親父。
そしてとうとう入場の時がやってきた。

やべえ、どーすんだよコレ・・・

「なあ、知ってる？新入生代表で挨拶する奴、そらで言っらしいよ」
同じく新入生として列に並んでいる長身で茶髪の3年のちよつと不
良っぽく制服を着崩した男子が入荷したての噂を話していた。

列に並んでいる新入生はみな口々に私語をしていて騒いでいるため、少しの私語もざわめきにかき消されそうだった。

「え、本当ですか、それ」

「・・・新入生代表挨拶ってそれなりに長いもんじゃねーの」

「そうだよ。だから見ものだなーって」

茶髪の男子が歯を出して笑う。

隣の茶髪のショートヘアの男子は、呆れるように言った。

「見ものって蓮^{れん}・・・」

「だってそうじゃね？聖斗^{せいと}だってちよっと思ってるじゃねーの？なあ、桐^{きり}」

「まあ・・・どんだけ期待がかかった優等生なのか」

その隣にいる漆黒の髪のストレートで首までのショートの髪の男子は、少し悪戯に微笑んだ。

その時、体育館の中から進行を務める教頭の声がマイクを通して聞こえてきた。

とたん一瞬にして新入生達は静まりかえる。
新入生の入場だ。

『新入生代表挨拶、1年C組 星野柚奈』

「はい」

柚奈は立ち上がり、祭壇の上にいる校長の正面へ立った。
静かに深呼吸をする。

そして、口を開いたが、言葉がでてこない。

やべえ。早速忘れた。

少し不審な間が空く。

柚奈は頭の中をかけめぐらしたが、どうしても最後のまとめのフレーズしか思い出せない。

かきだしと内容をすっかり忘れてしまった。

少しずつ体育館内がざわめきだしたときだった。

「・・・・・・桜が花開き、山々の木々が新芽を芽吹かせ、暖かな春の日差しが校庭の花々を美しく照らしています」

突如始まったアドリブの挨拶に、体育館は一瞬にして再び静寂に一つまれた。

柚奈はそのあともすらすらとアドリブを続けていく。

用意していた台本とは違う文を、思いついたまま口にした。

『礼』

教頭の合図で柚奈は頭をさげ、自分の席へと戻った。

何とかアドリブで切り抜けた。

柚奈はひとまず胸をなでおろした。

「あれ、多分アドリブだったよなあ」

入学式も無事終わり、新しい教室へと男子3人は歩いていた。
茶髪の蓮と呼ばれていた男子は頭の後ろで手を組んだ。

「アドリブにしては結構内容もよかったんじゃないですか」

「それ思った。最初の書き出しなんて、俺インターネットで調べなきゃ多分わかんねーよ。なあ、桐」

蓮はははっと笑う。

黒髪の桐と呼ばれた男は1人黙っていた。

そして3人はC組の教室へと入っていった。

第2話

Short Girl

「みんな入学式お疲れッ！これからいろいろ配り物していくからその間に周りの奴らと自己紹介済ませておけー」

随分と適当な先生だな、と柚奈は呆れる。

周りの奴らといっても、このクラスは柚奈と同じ中学出身の人が4割ほど占めている。

なのでほとんどが知り合いなのだが、柚奈の周りの席はどうも見知らぬ顔ばかりだった。

あ、入学式隣だった子。

柚奈の前の席は、なぜか出席番号が1番前のはずのあの小さな女の子だった。

まだ初日のはずなのに、席は出席番号順ではないのだろうか？

「あ、そういえば視力が悪い奴がこのクラス異様に多くてなあ。席順、バラバラだから！」

思い出したように赤センが言う。

なるほど、そういう事か。

前からまわってきたプリントを、その子から受け取る。

そのとき偶然にも目があった。

ここは自己紹介しておくべきだろうか。

その子も何か思っているのか、柚奈から目をそらそうとはせずじっ

と見つめている。

「私、星野柚奈。よろしくね」

すると、入学式の反応とは違って女の子はすぐになっこり笑った。

「私、愛須^{あいす}美依^{みい}。こちらこそよろしく」

すぐく無邪気そうな幼い笑顔で美依はになっこり微笑む。

本当に入学式のときのような不思議なオーラはなく、いたって普通の子だった。

少し謎が残りながらも、柚奈も微笑み返した。

「周りの人に自己紹介しないと思って思っていたの。周り知らない人ばかりだから」

「そうなんだ。私は結構、知っている人多いの」

とかいいながら、左隣の奴も右隣の奴も後ろの奴も実は同じ中学ではなかった。

そしてこの3人はどうやら仲がいいらしく、さっきから楽しそうに雑談をしていた。

自己紹介をする空気でもなく、別にしようとも思わない柚奈はそのまま美依と話し続けた。

「何て呼んだらいいかな。私の事は美依でいいよ」

「私も柚奈でいいよ」

すると美依は再びになっこり笑った。

「本当はね、さっきから柚奈に話しかける timing 伺ってたんだよ」

ん？

少し間が空く。

美依は固まった柚奈を不思議そうに首を傾げて見ている。しかし聞き間違いだろうと柚奈は微笑んで続けた。

「他の人にも自己紹介した方がいいかな」

「あッ、あの」

ふと柚奈と美依は声がする方に視線をやった。

すると、柚奈の周りの席の男子に見知らぬ女子が話しかけていた。

「私、冬^{ふゆへ}辺^へっていうの。よろしくね」

何故か頬を異常に赤らめて3人の男子に自己紹介をしている。

すると、柚奈の後ろの席の茶髪の少し制服を着崩した不良っぽい男子が笑って言った。

「俺、三^み国^{くに}。よろしく！」

するとそれに続いて柚奈の右隣の席の茶髪のショート髪の男子が微笑んで言った。

「僕は漣^{さざなみ}です。よろしくね」

すると、三国と名乗った男子が柚奈の左隣の黒髪の男子をつついた。黒髪の男子は少し冬辺と名乗った女子を見つめたのち、言った。

「ああ………如月^{きわづき}。よろしく」

やけに単語だな、と思いながら柚奈は冬辺さんに目をやる。まだ頬は赤い。

すると、その周りの女子も騒ぎ出したことに気づいた。

「わ、私、木下っていいます！」

「私、近藤ですっ！」

とたんにたちまち柚奈と美依を除いたクラスの女子がその男子3人に自己紹介を初めていった。

その様子を、他の男子達は苦笑いで見ている。

「まーただな。蓮達」

「もてる男は大変だねえ」

皮肉を言っているが、なんやかんやでその男子達も笑っている。

あの3人は嫌われてはいないのだろう。

どちらかというと、好かれているようにも見える。

「すごい人気だねー。まるでmovie star並みじゃない？」

あ、まただ。

これはどう考えても聞き間違えではないだろう。

柚奈は聞いてみようかどうか迷った。

すると、赤センの声が教室のざわめきを上回る大きな声で言った。

「はい自己紹介タイムやめっ！いや、こんなに騒がしい自己紹介タイム先生初めて見たぞー」

赤センは胸をそらして大きく笑う。

本当に親父らしい笑い方だ。

「はい、ではこれから一人一人ちゃんと自己紹介していきたい
と思いますーす！」

わーとぱちぱちぱちーと自分で歓声と拍手をやってから赤センは説明を始めた。

「名前と趣味または特技だけでいいかなー。あとなんか自己アピールでもあれば自由にやってかまわんぞー。はいじゃ、最初は愛須
！」

名前を呼ばれた愛須はその場で立ち上がった。
しかし、少し首をかしげたまま何も言わない。
あの入学式のとときと同じだ。

「どうした？愛須」

「ジコって何ですか？」

赤センの目が一瞬点になる。

しかし、すぐにポンツと手を叩き、また大声で笑い出した。
その様子にクラスみんなはついていけない。

「あー悪い悪い！！忘れてたわ。みんな！えー、愛須はなあ、去年までずっと海外暮らしだったんで難しい日本語や漢字はわからないから助けてやれ！」

「へー、すげえ」

「帰国子女ってやつ？」

「かつちよいー」

教室が少しざわめきはじめる。
でも、これで柚奈は疑問がとけた。

ああ、だから入学式的时候は同中って略語がわからなかったのか。

「で、ジコって何ですか」

「いや、先生に聞かれてもなあ……先生、日本史だから。完全な日本語専門だから」

美依は少し困った顔をした。

柚奈は美依のスカートの裾を軽くひっぱった。

「？」

美依は後ろを振り向いた。

柚奈は小さな声で耳打ちした。

「自己っていうのはSelf。自己紹介の自己と一緒にだよ。自分の何かアピールするものがないかって事」

一瞬、美依は驚いた顔を見せたがすぐにぱつと明るくなった。
そしてThanksと耳打ちして前を向いた。

こう見えても柚奈は以外に英語が話せる。

実を言うつと、何気にフランス語も話せるのだ。

しかし、これはおそらく誰も知らない。

まあ、誰にも言っていないから当然なのだが。

「えっと、愛須美依です。特技はvi・・・バイオリンです」

「おおーッ」

「英語ペラでしかもバイオリンだって」

すげえ、とたちまちクラス内での美依の評価が上がっていく。
クラスのざわめきは一層大きくなった。

「今まで海外生活だったのも、バイオリンの活動があったからです。
演奏講演会とか、コンテストとかあったんで」

よりいっそうクラスのざわめきが広がる。

柚奈もほおーと口を開ける。

そして盛大な拍手を受けて、美依は少し控えめに頬を赤らめて席についた。

その後も自己紹介はスムーズにどんどん進み、笑いをとる人もいれば地味に終わる人もいた。

すると、次の瞬間、突如女子のきゃいきゃいという高い声があちこちから重なって聞こえた。

柚奈の左隣の如月という人の番だ。

「……如月桐^{きつきとう}です。特技はピアノです」

短ツ、と思いながら立っている桐を見上げた。

女子がきやあきやあいうのも無理は無い。

そんな顔をしていた。

年頃の男子にしてはニキビ一つない綺麗な肌、大きな瞳、まさにイケメンと呼ばれる奴か。

いや、でもイケメンというよりは美形と言った方が似合うかもしれない。

「桐ー、何か自己アピないのか？例えば、今まで●報告されましたみたいな。まッ、おそらく俺には劣るけどな！！」

早速下の名で呼び捨ての赤センは、雄叫びのような笑い声をあげた。しかし、クラスみんなは何故か期待した目で桐を見つめる。

眉間にシワを寄せ、あきらかに嫌そうな顔をした彼は静かに言った。

「自己アピールは……英語とフランス語が話せる事です」

告白はー？！とクラス中が期待を裏切られたとばかりにブーイングする。

しかし、それを完全に拒否して彼は席についた。

「まあまあ、みんな。俺の方が明らかに多いとわかっていて口にするのは彼も気がひけるだろう。しかし、それは恥ずべき事では」

「早く次いつてくださーい」

クラスからどつと笑いが起きたあと、再びどんどん進行していった。柚奈は座った彼の横顔をじっと見つめた。

きれいな顔してんなあ。

てか、英語とフランス語って私と一緒にじゃん。

すると、またさきほどの桐と同じような雰囲気にも包まれたと思いきや、次の番は柚奈の右隣の彼だった。彼は微笑んで静かに立った。

「漣^{なみ}聖斗^{せいと}です。特技はリフティングとマジックです。自己アピールは……そうだな」

「●報告されたとか？」

「赤センそればっか」

「てかその質問モテる奴だけかよ」

再びどつと笑いが起きる。

聖斗は照れくさそうに頭をかいて言った。

「何回告白されたかはわからないけど、彼女ならいません」

その瞬間、キヤーと女子の叫び声が教室に響く。そのとき柚奈の左隣の桐は思いきり顔をしかめた。

こいつ、一番モテるのに女子が嫌いなタイプだな。まあ、それがモテるんだろうけど。

はっとため息をつき、柚奈は机に頬杖をついた。

そして女子のピンク色の余韻を残しながら聖斗は席についた。

こいつもモテるタイプか。

なんかいっつも微笑んで……紳士っぽい感じ。

「次ー、星野！」

「あ、はい」

柚奈は静かに立ち上がる。

すると、そのとき後ろから声がした。

「あ、入学式で挨拶した人じゃん」

後ろを振り向くと、そこには茶髪で少し制服を着崩した一見軽い不良にも見える男子がいた。

確か、自己紹介では三国と言っていた。

「おー、星野は既に有名人だな。やっぱアドリブで挨拶してよかったろ！」

「いや、別にそこにつながるわけじゃないと思いますけど」

軽くため息をついて、ひとまず気をとりなおして柚奈は自己紹介を始めた。

「星野柚奈です。特技は……ピアノです。自己アピールは……」

「●報告された？」

「星野にもするのかよ！」

「えーだつてー」

再び笑いの渦に巻き込まれる。

はははと軽く笑い流して柚奈は続けた。

「自己アピールは英語とフランス語が話せる事です」

「おー、何か桐と全く同じ自己紹介でしたな。てかこのクラス英語しゃべれる人3人もいるわけ？愛須の通訳には思ったより不自由しなさそうだな」

赤センは白い歯を見せて笑う。

柚奈が席についたとき、ふと隣からの視線に気づいた。

そちらへ目をやると、桐が柚奈の方をじっと見つめていた。

柚奈と目があつと、ふつと桐は視線を逸らした。

「柚奈、英語話せるんだね！」

ふと前へ視線を戻すと、うれしそうに美依が言った。

「わからない事があつたら柚奈に聞こうつと」

「O・K」

二人は互いに微笑みあつた。

すると、柚奈の後ろの席の男子が立ち上がった。

「三国蓮みくにれんです。特技は腕相撲です！」

「おッ蓮、お前俺の異名を知っててそれ言ってるのか？」

赤センがふっふーんと笑う。

「俺は星心高せいしんこうの上腕二頭筋じょうわんにとうきんと呼ばれた男だぞ」

「なんだよそれ！」

「じゃあ、後でやろうよ先生」

「おう、望むところだこのヤロウ」

思い切り力強いガッツポーズを見せ、笑いが絶えぬまま蓮は席に着いた。

こうして一通りの自己紹介は終わり、高校初日はようやく幕を閉じる。

「お前ら、明日は委員決めとかいろいろすんだから休むなよー！！」

その言葉で一同は解散となった。

スクールバックを肩にかけ、疲れからふうと柚奈はため息をついた。すると、バツと誰かが腰に手をまわす。

「柚奈！」

「美依」

美依は柚奈を見上げてにっこり笑う。

「ねえ、今日柚奈の家に遊びに行っちゃだめかな？」

「うん、別にいいよ」

「やった！」

美依は柚奈の隣に並んで歩く。

柚奈は美依のまだ幼さが残る横顔を見つめた。

私はこの子と仲良くなるのかな。

柚奈はまだ見えない何かを深く考えながら、家路を進んだ。

第3話

H i g h t e n s i o n

「うわーここが柚奈ん家?!」

「うん」

美依は口をあんぐりあけてその屋敷を見上げる。

三階建て+広い庭園付きの大きなお屋敷がそこにあった。

大きな門を開くとキィと錆びた金属音がする。

美依は柚奈の後を急いでついて歩いた。

「柚奈ん家ってお金持ちなんだね」

「それがそうじゃないんだな」

「いやいやいや、このお屋敷前にしてその言葉のどこを信じればいいのかわかんないよ」

「本当だって」

そういつてまっすぐレンガの敷かれた屋敷へと続く一本道を二人は歩く。

そうして大きな扉を柚奈は引いた。

「あれ、閉まってる」

おっかしーなと頭をかいて、もう一度引いたが扉は開かない。

「どうしたの？」

「うーん……今日は弟の方が早く帰ってくるから鍵持って出てないんだ。その弟が出かけちゃってるみたい」

「柚奈、弟いるんだ」

「うん。美依は姉妹はいないの？」

「うん。一人っ子だよ」

美依はにつこり笑って首をかしげる。
どうやら美依は首を傾げるのが癖のようだ。

「……しょうがねーなあ」

そついつと柚奈は屋敷の裏側へと回った。
美依もそのあとを追う。
すると庭を一望できるほどの大きな窓に柚奈は手をかける。

「おっ、開いてる開いてる」

「えっ、ここに入るの」

「うん。どうぞどうぞ」

美依はちよつと可笑しそうに、そして楽しそうに窓から中へ入った。

「わー、きれいだね」

「何か飲む？」

「あ、お茶でいいよ」

美依はゆっくりとソファに腰かけた。

どうやらここはリビングのようで、白いソファにガラスのテーブルがあった。

そしてテーブルの上には柚奈の弟が飲んだ後なのか、空のティーカップが2つあった。

「何で2つ・・・？」

「はい、どうぞ」

「あ、ありがとう」

ふわりと漂う上品な甘い香りは紅茶だった。

「わ、紅茶だあ」

「普段うちは麦茶か緑茶なんだけど、帰国子女の美依に Japanese tea は合わないかと」

美依はむせるように笑う。

つられて柚奈も笑った。

それから二人は、美依のアメリカでの話を聞いたり柚奈の日本の話をしたりで大いに盛り上がった。

久しぶりだな。

柚奈は思わず微笑んだ。

「へえー、よかったじゃん。もう友達ができたんだ」

「うん！昨日は家に遊びに行ったんだよー。それがすごいお屋敷でね！」

「え、まじかよー！」

「まじ？」

「おーう！コノニホンゴツウジマセー」

柚奈が教室へ入ると、なぜか空席のはずの柚奈の席はとりかこまれ、大いに盛り上がっていた。

柚奈がそれを邪険な目で見ていると、それに蓮が気づいた。

「あ、おはよう！柚奈！」

「ああ……後ろの席の」

さっそく呼び捨てかよ、と眉間にシワを寄せた。

まあ見た目からして軽そうだもんな、こっという奴は。

柚奈はため息をついて机にカバンを置いた。

「Good morning! Yuna!」

「Good morning, Mi」

互いにつこりと笑い合う。
思わず、ふふと声が漏れた。

「あ、そうだ。柚奈、この人桐っていうんだけど」

そういつて美依がぼんと肩を叩いたのは、柚奈の左隣の席の男だった。

昨日の自己紹介でずいぶんともてていたやつだ。

そのわりに女嫌いでクールで、これは女子に人気あるわけだ、と柚奈が納得した男だった。

「ついさっきね、私の幼馴染だつて事が判明したの！」

「え、まじで」

「まじ？」

再び出沒したこの言葉に美依は首を傾げる。

あ、癖だ、と柚奈はつい思った。

「Reallyつて意味だよ」

「へえー」

すぐに憂が説明を入れる。

そういえばこいつも英語が話せると言っていた。

しかし、桐は輪の中には入っているが、一人本を読んでいる。

柚奈は横目で桐を睨んで席についた。

「私ね、ずっと海外を飛び回ってて、小さい頃の方が音楽活動を中心とした生活だね。私はバイオリンなんだけど、桐も昔ピアノで音楽活動してて、何かと一緒にってたの！」

「へえー」

じゃ、この人ピアノすごい上手なんだ。
再び柚奈は桐の横顔を見つめた。

「そんで、その桐の大親友の俺と聖斗が、美依と仲良くなったってわけ」

「はあ」

曖昧に相槌をうつた後、柚奈は席に座った。
すると、蓮が柚奈の肩にポンと手を置いた。

「ちなみに、俺の事は蓮でいいから」

「僕も、聖斗って呼んでください」

「あーどうも」

柚奈は苦笑いした。

その様子を、美依は黙ってじっと見ていた。
こうして柚奈はただ、輪の中に入って美依達の会話を聞いているだけで朝休みを終えた。

なんか疲れた。

こういうテンション高いノリについていけない。

柚奈は小さくため息をついた。

それを美依は見逃さなかった。

それから柚奈をじっと見つめていたが、何も言わずチャイムを合図にそれぞれ散り散りに席についた。

第4話

アップーリーチーズ

「「「いっただつきまーす！」「」」

「・・・いただきます」

昼休み。

教室には柚奈達と蓮達以外誰もいなかった。

ほとんどの人は中庭でお弁当を食べたり、食堂で食べたりするからだ。

柚奈は軽くうんざりした表情で、卵焼きを口に運んだ。

あれからずっとこの五人で行動していた。

美依は問題ないのだが、なぜ蓮達までついてくるのかと柚奈は不快に思っていた。

しかし、美依の楽しそうな表情を見ると、あまりはしゃがない柚奈としゃべるよりも蓮のような常時ハイテンションな奴の方がいいのかもしれない。

そう思い、柚奈は文句を言えずにいた。

柚奈がため息をつくとき、桐と目が合った。

柚奈は不機嫌を隠さずあからさまに目をそらした。

桐は桐で、蓮達の会話に参加していなかった。

弁当を食べながら、蓮達のおふざけを観覧している。

その表情は退屈そうでもなく、楽しそうでもなく、無表情だった。思わず柚奈は桐の箸を持つ指に目をやった。すらりと長くてきれいな指。

ピアニスト向きの指だと一目でわかった。

「・・・何」

柚奈がじつと見つめている事に、桐が気づいた。

柚奈はハツとしたが、すぐにふんと目をそらして三つ葉のおひたしを一口で全部口の中にいれた。

「柚奈！」

自分の名前を呼ぶ声に、ふと顔をあげる。

すると、美依が柚奈の顔をじつとのぞきこんでいた。

「どしたの？ぼーっとして」

「ううん。別に」

柚奈は微笑んだ。

美依も「そっか」と微笑み返した。

「柚奈もこっち来ない？」

「いや・・・私そのスイーツ戦隊とか全く知らないんで」

「えー？！知らないの？！私、日本に帰国したときに最初にハマった番組なのに！」

美依はどうやら蓮達に「ハマった」という表現を覚えてもらったらしい。

今の日本人にとっては何気なく使う日常会話の一種であるが、美依にとってはかなりマイブームらしい。

その時、予鈴のチャイムが鳴った。

そろそろとクラスメイトが教室へ帰ってき始めた。

ふう、と柚奈は息をつき、自分の席へ戻った。

それを見ていた美依は、スイーツ戦隊の動きをやめ、蓮にささやいた。

「柚奈……楽しくないのかな」

「うーん。まだ馴染めてないだけじゃん？」

「そうですよ。心配しなくても、まだこれからですって」

横からひよつこりと聖斗も顔をだして微笑む。

しかし、美依の悩ましげな表情は変わらなかった。

今日も一日疲れた。

毎年、新学期はいつもよりも疲れる。

柚奈は今まで、特別親しい友達をつくったことがない。

しかし嫌われているというわけでもなく、ただグループに属していないというだけでどちらかというと人間的には男女ともに好かれていた。

その明晰な頭脳で支持率も高く、いつも学級委員をしていたし、容姿も端麗なので告白されるのも日常茶飯事だった。

しかし、親友もないのだからもちろん彼氏だっていたことがない。けど、生活に不自由は無かった。

グループ学習のときにはいつもどこかのグループが必ず誘ってくれた。

休み時間なんか、席の近いグループの輪の中に入って過ごしていた。

けど、特定の人物をつくることはなかった。

他の人よりも親しい人物はいるが、ただ他の人よりも長い付き合いだというだけで特にこれといった感情も付き合いもない。

プライベートで遊んだ事がある人もほとんどいなかった。

他の人にわからないほどクラスに溶け込んでいながらも、柚奈は何となく浮いているのを自分で感じていた。

何故だろう、と感じる事はあっても、嫌だと感じることはなかった。今の生活で満足していた。

特定の人物などつくらなくとも、好かれているのだから別に構わなかった。

だから美依のように、ずっとついてくる子も初めてではない。

美依も今までの子のように、いつか自然にふらっと離れ、どこかのグループに属すのだろう、そう考えていた。

美依は明るいし、可愛いし、口も達者だ。

だから、今回のように桐という幼馴染を見つけ、そのグループに入っていたのも想定内だった。

だが、そのグループに柚奈も一緒に連れ込まれるのは予想外だった。

正直言っと、うんざりしている。

あまり、あのような常にハイテンションなグループは好きじゃない。そういうグループはたいてい、新学期早々トラブルを起こすのだ。そしてたいてい、二学期ごろになると内部亀裂が起き、グループが

一旦解散される。

だが、しばらくすると仲なおりして元に戻っているのだ。

しかし、互いに対する嫌な部分はいいかわらず根に持っている。

そういうどろどろした青春を、柚奈は好まない。

美依はいい子だ。

だが、この先もずっと一緒に行動する気は無かった。

「おかえりー」

柚奈がリビングの扉をあけると、男がソファにねころがってコントローラーを握りながら低いテンションで言った。

180と、姉の柚奈をもはるかに上回る背の高さ。

そして黒髪の柚奈に対して、染めてもないのに薄い茶髪のくせつけ。

見た目に関して、あまり似ていないがこれでも血の繋がった柚奈の弟だ。

「ただいまー……って何？！和葉かずはもうギルドラウス倒したの？！」

「んー……姉さんが言うほど強くも無かったよね……ぐふつ。ちょ、重い」

「んあ？なんだって？私が二週間かけても未だ倒せていないギルドラウスが何だって？」

「いや、何でもありません。すごく手強くて倒すのに大変苦労しました」

柚奈は寝ころぶ弟、和葉の背中に寝転がって、ぴよんぴよん体を揺らした。

弟の澄んだ黒い瞳は、柚奈を映す事無くテレビ画面にくぎ付けになっている。

柚奈と弟の唯一の共通する部分は大きな黒い済んだ瞳だった。

「ちょ、まじでやめて。まじでどけて。戦の真っ最中だから。グレウスの吹き出す炎はチャージの時間すっげー短いんだから」

「え、グレウスって誰？！お姉さんまだそこまで行っていないんですけど」

「何やってんの2人とも」

2人を見下ろすその男は、どうやらシャワーを浴びていたようで髪が濡れていた。

その髪も染めてないのに明るい茶髪。

まるで生まれた時から15年後の流行の髪形がわかっていたかのような、ワックスでもつけたような生まれつきのくせつけ。

その男の姿は、和葉の生き写しかというくらいに和葉そっくりだった。

それもそのはず、この男は和葉の双子の弟だ。

「こらー、和音風邪引くからちゃんと服着なさい」
かずね

「人の事言えないよね。制服のままゲームしてる人に言われたくないよね」

「ゲームしてないもん。見てるだけだもん」

「和音―、さつきギルドラウス倒したよ」

「別にわざわざ報告しなくとも、ギルドラウスそんなに強くないし重要なキャラでもないし」

「あー！！和音まで同じ事言うー！！」

柚奈はこの弟との時間が好きだった。

もちろん学校生活も満足しているが、柚奈は弟達との会話が、クラスメイトとの会話よりも楽しいと感じていた。

それに、学校では少しおとなしい柚奈も、弟の前では普段柚奈があまり好きではないテンションの高い奴等とそう変わらない。

「2人とも新学期どう？」

「別に。普通」

「友達できた？」

「姉さんみたいに新しく入学したわけじゃないんだし。もう中3だからね。周りみんな知り合いだし」

「そうそう。クラスも3つしかないんだしさ」

弟達も柚奈と同様、クラスではとても好かれていたようだった。容姿がこれらのアイドル並かそれ以上とも言えるほどよいので、異性からの好かれようは柚奈をはるかに上回る。

ただし、弟のどちらも柚奈と同じように彼女がいた経歴は無い。しかし、弟達に親友がいるのかどうかは、柚奈は正直よくわからなかった。

だが、柚奈とは違って弟達は友達の家遊びに行ったりとプライベ
ートの付き合いもあるようで、クラスで浮いているわけではない事
はわかっていた。

和葉も和音もしっかりしている。

柚奈の心配など、微塵もいらないほどに。

「そーいえばあんた達もそろそろテストがあるんじゃないの？」

「まあね」

「ゲームなんてしてる暇ないでしょ」

「あーやばいやばい死ぬ死ぬ。回復回復」

髪をぬらしたままの和音は和葉の上に寝転び、ソファの上には同じ
顔が二つ並んでいた。

二人とも柚奈の質問にともに答えるつもりはないらしく、その目
はテレビ画面のみを映していた。

「ったくもー」

柚奈はお茶を一杯飲んで、夕飯の支度を始めた。

明日も学校か。

学校へ行くという事が、なぜか妙に憂鬱に感じた。

やはり美依達の事なのだろうか。

私の事など、放っといってくればいいのに。

柚奈はため息をついて、どれも同じに見える千切りのキャベツを眺
めた。

第4話

アップーリーチーズ（後書き）

サブタイトルの「アップーリーチーズ」とは

Upper reachesの事です。

気分的にカタカナにしてみました

カタカナ表記がこれであっているかどうかはわかりません……

第5話

Cloudy Humming

「Hello, everybody! Come on my baby doll! I want to dance with you together...」

美依は一人、朝の誰もいない教室で英語の歌を口ずさんでいた。アメリカにいたときにちょうど流行っていた曲だ。

今頃アメリカでは時代遅れになっているのだろうが、美依はこの曲が好きだった。

ただ、あまり芸能に興味がなかったためにこの曲の歌手はわからない。

自分の机に座り、足をぶらぶらさせてカーテンがふくらむ様子をずっと見ていた。

朝早くから学校に来た事になんら意味は無かった。

ただたまたま朝早く目が覚めたから、というわけでもなく、ただ普通に登校してきたら誰もいなかっただけの話だ。

すると、教室の扉が開いた。

そこには桐の姿があつた。

「Good morning, Kiriri」

「挨拶ぐらい、日本語でできるんだろ」

さつきまで英語をつかっていた名残りで、英語でおはようと言ってみた。

わざわざそれを説明するのもなんだか面倒だったので、美依はそのまま話を続けた。

「早いね。いつもこのくらいなの？」

「いや。いつもは蓮達と一緒に来る。今日は朝練があるから」

「へえ。もう部活入ったんだ」

「勧誘がうるさかったから。まあ、どうせ野球部に入るつもりだったし」

ふーん、と相槌を打った。

桐が運動神経がすごくいいことは、見た目でわかったし、何よりもその性格のイメージ通りだった。

しかし、美依にとつて桐が野球をする事は少し違和感があった。

あの、ピアノスト向きの素晴らしい長い指を、ボールを投げるために使うなど、もったいなさすぎだと思った。

「桐は……もう全然弾いてないの？」

彼が返事を返すまでに、少し間があった。

その間が何を意味するのか、美依ははっきりとはわからなかった。

「曲はもう長い事弾いてない……けど、なまりたくないから動かしてはいる」

「なまりたくないって、いつか復帰するって事？」

「いや。それはもう、無い」

何故そこまではっきりと言うのか美依にはわからなかった。

蓮と聖斗と話していてわかったのが、二人とも桐のピアニストとしての経歴を知らない。

桐が自分の過去を誰にも明かしていないことに、美依は少し疑問を持っていた。

「たったあれだけで……もつたいない」

「何を今更」

「音楽界では伝説になってるし、ピアノ界は今でもまだあなたを血眼になって探してる。あ、いっとくけど私はそんなじゃないよ」

桐はわかってる、と言う代わりに前髪をかきあげて息をついた。

そんな桐を見てみると、どこかピアノの事について話すのが苦痛のように見える。

「お前はどこにも入らないのか？ああ……吹奏とか？」

桐がピアノから話をそらそうとしたのが、すぐにわかった。

美依は黙って首を振った。

なんだか今日の自分はテンションが低い。

自分でもそう思うし、桐もそう思っているだろう。

しかし、桐はそれを口にしない。

誰だって訳無く気分ののらない日だってあるという事を、彼はちゃんと理解しているのだろう。

「吹奏にバイオリンは無いし、バイオリンを弾きたいわけじゃないけど、特にやりたい事もない」

ぶらぶらと揺れる自分の足を眺めながら言った。

桐は窓の方を向いて、服を着替えている。

「何なんだろうなあ・・・・・・・・私、何しに日本に帰ってきたんだろ」

足の動きをふいに止めてみた。

風が吹き、カーテンが揺れて金具が動く音と、桐の着替える物音だけが聞こえた。

「バイオリンであんなに名声を勝ち取ったのに、急にやめてもよかったのか・・・お前、もう世界一なんだろ」

「別にやめたわけじゃないよ。休憩の期間をおいただけ・・・・・・・・それに世界一だったって、たかがファガローで1位とっただけで」

「ファガローは世界で最も難関といわれるバイオリンの国際コンクールだろ。それで優勝したって事は、世界一だ。しかも、史上最年少」

美依は黙って自分の指を見詰めた。

そして自分のあごの左辺りにそつとふれた。

ここに、バイオリンの型が赤くなっている。

「ここのアザね・・・よくからかわれた。ドイツにいたときにつけられたあだ名がね、「アザつきエンガイガー」だったの。あ、エンガイガーっていうのは・・・」

「知ってる。ドイツ語で、バイオリニスト」

ふいに風が強く吹いた気がした。

低いソからシにスラーがかかっていた。

「私、小学校のときも中学校のときも・・・まあ、外国はたいてい小中一貫だけど、どこの国でも馴染めなかったんだ。バイオリニストとして功績をあげればあげるほど嫉妬され、東洋人だからって差別された。いじめっていうのかな」

美依は力なく微笑んだ。

「日本に帰ってきたのは・・・ただ、逃げるためだったのかも
しれないなあ」

桐はどうやら着替え終わったらしく、バッグのチャックをしめる音がした。

桐はエナメルのバッグを肩にかけた。
何も言わずにでていくのかと思ったが、桐は口を開いた。

「バイオリニストとしてのお前を、誰も友達として受け入れようとはしなかった。それは仕方ないんじゃないの。世界で活躍してるトップスターのようなお前に、嫉妬しない奴などいない。だからバイオリニストとしてじゃなく、ただの女子高生として過ごすために、日本に来たんだろ」

桐の声は心地いい。

バイオリンの音ともピアノの音とも違う。
何故かそんな事をふと思っていた。

「でも柚奈はなんだか、私を鬱陶しがってるように見える」

教室のドアが開く音が聞こえる。

桐は出て行く寸前、一言言った。

「鬱陶しいなんて言葉、よく知ってたな」

ドアが閉まった。

低いファの音が、どんどん遠ざかって行く。

美依はため息をついた。

そういえば、今思うと何故桐はわざわざ教室へ来たのだろうか。

着替えるなら、部室で着替えればいいのに。

もしかして、美依が病んでいる事を知っていたのかもしれない。

わざわざ美依の話をきくために教室まできたのだろうか。

そういう隠れたおせっかいは、昔と変わらない。

そのとき、桐の低いファの音に混ざって低いラの音が聞こえてきた。

「あ、美依」

ふと目線をあげるとそこには柚奈がいた。

柚奈は首をかしげて少し微笑む。

「どうしたの？こんな朝早くから」

「柚奈こそどうしたの？」

「私は日直だから」

柚奈はそういって、自分の席にスクールバッグを置いた。

机の中に教科書などをいれながら、ふと柚奈の手がとまった。

「美依？どうしたの？ボーツとして」

「え？ううん。別に・・・何でもない」

「そう」

柚奈は特に怪しむでもなく、もう一時間目の用意をしまじめていた。美依はテンションをあげなければ、とふいに話を切り出した。

「柚奈って、何の部活入るの？」

「うーん・・・そうだなあ・・・まだ決めてないや。美依は？」

「私？私もまだ決まってるないの」

「そっか」

美依は小さく首をかしげた。

てつきり桐のように、吹奏に入らないのか、と聞いてくるものだと思っていた。

なのに柚奈は何も言わない。

美依は思わず、自分から口を開いた。

「吹奏に入らないのか、って聞かないの？」

「え？」

柚奈はきょとした顔で美依の方を見た。

しばらく沈黙が続いたあと、ふいに柚奈が微笑んだ。

「どうして？」

「だって、私バイオリンやってたって」

「吹奏にバイオリンはないじゃない」

「でも、音楽をやってたんだから吹奏に入るって考えるのが普通じゃない？」

「音楽をやってたからって、それを好きでやってたのかどうかは私にはわからないわ。幼いころからやってるのなら、尚更。親にやれっていわれてやっているのかもしれないし。だから、日本に帰ってきたんじゃないの？」

美依は何も言えず、口を半開きにしたまま柚奈を見詰めていた。

柚奈は美依の方は見ておらず、机の中からこそそと教科書を探している。

「私も、ピアノやってたから……でもだからって、吹奏に入りたいわけじゃないもの」

「そういえば、自己紹介のときにそんなこと言ってたね……柚奈も、ピアノ弾くのは好きじゃないの？」

「ううん……好きだよ」

ふいに柚奈の手が止まった。

ピアノの事を話す柚奈の横顔は、どこことなく桐のあの表情に似ている気がした。

「でも……うん、いろいろあったんだ」

柚奈は微笑んだ。

でも、どことなく無理矢理微笑んでいるように見えた。

柚奈にも桐に似たような、何か嫌な思い出でもあるのだろうか。

「ピアノ弾くの、ずいぶん前にやめちゃったんだ……でも、なまりたくないから毎日ならしてはいるけど」

桐と同じ事言ってる、と美依は思った。

そしてなんだかおかしく感じて、ふふつと声を漏らしそうになった。

「美依はすごいね。音楽をずっと続けてるんだもの……あ、努力の証だ」

柚奈は左のアゴの辺りに指をやった。

美依は自分のあごの左の辺りを触ってみる。

そこにはあの、バイオリンのあざがあった。

努力の証などと言われたのは初めてだ。

美依は微笑んだ。

「私何だか、柚奈と仲良くなれそうな気がする」

柚奈はきょとんとした顔で美依を見つめた。

正直、何と返ってくるか美依は不安だった。

こんな勝手なこじつけを言っ、また鬱陶しがられるかもしれない。

「そうだね……私も。そんな気がする」

柚奈はにっこりと微笑んだ。

風が強く吹き、黄色いカーテンが勢いよく膨らんだ。

第6話

曖昧ダイアレクト

どこことなく、美依が変わった気がする。

柚奈はそう思いながら、卵焼きを口に入れた。

我が家の卵焼きは甘さ控えめだ。

柚奈は甘党なのだが、弟は甘いのが苦手なのだ。

しかし、甘くなくとも和音のつくる卵焼きは美味しい。

「英語の先生の要先生さー、英語が田舎交じりでよくわかんない」

美依はウィンナーをほおばりながら言った。

美依はちょうど柚奈の前の席なのだから一緒に食べるのだったら美依が後ろを向いたら動かずに済むのに、なぜか美依が中庭で食べようと言い出したので、柚奈は美依と二人で中庭で弁当を食べている。ついこの前までずっと蓮達と一緒に食べていたのに、どうしたのだろうと柚奈は疑問を持っているのだがわざわざ聞かなかった。

しかし、弁当だけではない。

休み時間も「柚奈!」「柚奈ー」「柚奈ッ」とずっと柚奈にひっついてくる。

まあ、柚奈と一緒に行動するのは以前と同じなのだが、前までは蓮達とも一緒に行動していた。

なのに、はたから見ていると、美依は何故か蓮達を避けているような気がする。

「シカゴにでも住んでたのかな? Aussie English じゃない? 私、小さい頃 King's English で話すよう身につけさせられたらから、そういうの気になるの。柚奈の英語も綺麗な純正英語だよね」

キングズイングリッシュとは、上流階級の人が話す英語だ。

キングズイングリッシュを話せば、たいていどこでも歓迎される。それを話すようしつけられたということは、バイオリンの活動は相当本格的なものだったらしい。

柚奈もフランスなまりがあつたので、幼いころ美依と同じく、キングズイングリッシュを話すようしつけられた。

「そうだね・・・でも私はあんまりそういうの気にしないんだよね。でもCockney Englishはあんまり好きじゃないかも」

「あ、それはわかる。下町なまりって感じがするよね」

「それにしても美依はだいぶ日本語にすごい早く慣れてきたね」

「でもまだRとLの発音が残ってるってMomに言われるの」

「あ、また名残が」

二人で笑い合った。

美依の変わり様には少し疑問を抱いたが、それはそれでいい。

しかし、柚奈の予想とは違い、美依が柚奈から離れる気配がないのに少し戸惑っているのはあった。

「ほーい。じゃ、クラス委員を決めまーす」

暑くもないのに出席簿でパタパタと扇ぎながらめんどくさそうに赤センが言った。

とたんに教室がざわめきはじめる。

あちこちで、誰が何の委員になるとか、自分に票を入れてだとかいう声が飛び交っている。

案の定、美依も後ろを向いてきた。

「柚奈って何かなる？」

「うーん……でもやるとしたら図書委員あたりがいいなあ」

「そうだなあ、私は入るとしたら環境とか……環境とか活動無さそう」

「でも、環境委員でボランティアとか清掃とかするんじゃないかな。ドブ掃除とかしたりするんじゃない？」

「えー嫌だあー。じゃあ、候補から外しとこー」

美依は最近、選挙のニュースで「候補」とか「演説」とかいう単語を覚えたらしい。

微妙にアクセントの違うその単語が、柚奈には耳についた。

「ほーい。じゃ、まずは学級委員からいくぞー！なりたい奴は挙手！！」

赤センはそういつて思い切り出席簿を持った右手を振り上げた。だが、それに続いて挙手をするものは誰もおらず、急に教室が沈黙した。

「だよなー。やっぱめんどくせーもんなあ、学級委員なんてよ」

うんうん、とうなずきながら赤センはこうなる事を予測していたようだった。

そして、なぜかニンマリと笑った。

「だがな、学級委員での大切な役割なんだ。雑用を難なくテキパキとこなし、俺の指示にいちいち文句をつけない真面目なやつが・・・」

「つまり赤センの手と足となって働き、面倒な事の一切を引き受けるような奴隷みたいな感じ？」

「そうそう・・・って待て蓮！！そんな事はないぞ！学級委員になったヤツには俺にひいきしてもらえるという特典が・・・」

「いらねー！」

クラス中がどつと沸きあがった。

美依も無邪気な笑顔で笑っている。

「鼻^{ひいき}痕」などという難しい単語はどうせ知らないのだろうが、楽しい雰囲気^{ひいき}に吞まれているのだろう。

柚奈は少し微笑みを浮かべてはいたが、笑ってはいなかった。

「じゃ、もう適当に俺が決めるぞー」

「えー！推薦とかで決めないのかよ」

「このクラスでのルールは俺だ！面倒くさい事はしない！それがルールー！」

ブーイングまじりの笑い声が沸き上がったあと、クラスは急に静まり返った。

赤センは出席簿を開き、名簿を見ている。

クラス中が頼むから選ばないでくれ、と神頼みでもしているようだ。

「よーし！！決めた！」

赤センが勢いよく出席簿を閉じた。

そしてビシッと指をさした。

柚奈にクラス中の視線が集まった。

「星野柚奈！！！！それから如月桐！！！！！」

「え」

そのとたん、クラス中から拍手がわきあがった。

断ることもできず、仕方なく頭をかいた。

すると、近くの席での会話が柚奈の耳についた。

「学級委員でめんどくさいけど、如月くんがするなら私やりたかったなあ」

「立候補しとけばよかったね」

へえ。

柚奈は横目で桐を見た。

自分が学級委員に推薦されることをうすうす予測していたようで、特に驚いてもいない。

しかし、面倒くさい気持ちはあるようで、憂鬱そうにため息をつい

ていた。

「柚奈すごい」

「何が」

「きつと入学式でのアドリブが効いたね」

ふふつと悪戯に美依は笑った。

柚奈はため息をつく。

正直、学級委員になりたかったわけではないが、柚奈は今まで学級委員をやらなかった事が無い。毎年、毎回のよう学級委員に推薦され、中学ではずっと学級委員をつとめていた。

高校になっても同じか。

もう一度柚奈はため息をついた。

「じゃ、早速進行頼むぜお二人さんっ！」

「え」

「さっそく雑用押しつけだ」

クラスがまたドツと沸き上がる。

赤センはすでに提出物を抱えて教室を出ようとしている。

「え、ちょっと赤セン！！一体、何を・・・」

「詳しい事はその紙に書いてあるから。よろしく」

赤センは柚奈に敬礼の姿勢をすると、教室のドアをピシャンとした。

教室は絶えずざわついている。

柚奈は深くため息をついた。

そのとき、隣の桐が立ち上がった。

「お、頑張れゝ桐」

「早速お仕事ですね」

蓮と聖斗が面白そうに笑う。

「うつせ」

半分鬱陶しそうに、そして半分はにかみながら桐は前へと出た。そのとき、前の美依が柚奈をつついた。

「柚奈もでないといけないんじゃないの？」

「あ、そっか」

柚奈も続いて急いで前へと出た。

机の上にあつた赤センのいう詳細の書いてある紙は1枚しか無く、何となく近寄りがたい雰囲気のある桐に柚奈は自然と距離を置いた。それにしても、と柚奈は目線を桐から教室へ移す。

女子の目線が痛い。

男子はわりとあちこちで喋っているが、女子はみんな静かに柚奈と桐へ注目している。

いや、おそらくお目当ては桐なのだろう。

そしてその桐の隣に立っている私に、嫉妬の念のこもる眼差しを向けているのだと柚奈は察した。

「はい」

「あ、ども」

桐はふいに紙を手渡した。

そしてその紙に目を通していているうちに、桐はパンツと出席簿で机をたたいてみんなの注目を集めた。

「これから委員を決めます……まず、保健委員から」

一気に教室は静かになり、みんなが桐の言うことを聞いていた。すごい影響力だなあ、と思わず桐の横顔を惚れ惚れと見つめた。すると、その桐がこちらを向いて言った。

「書いて」

桐が指さしたのは黒板。

ああ、と柚奈は小さく声を漏らし、白いチョークを手にとった。何て愛想の無い奴なんだろう、私は。

はは、と自分で苦笑しながら柚奈は黒板に書いていった。

「あ、ごめん。聞いてなかった。図書的女子誰？」

「美依」

「お」

柚奈は思わず振り返った。

美依と目が合う。

美依はにっこり笑って手でピースサインをしていた。

柚奈も微笑み返し、小さくピースサインをした。

そのとき、教室前方の女子が目立たぬよう陰で会話しているのがふと目についた。

「ねえ………今、下の名前」

「だったよね！」

「えー、嘘。如月くんの何なの……」

「如月くんが英語しゃべれるから通訳してもらってるの……」

柚奈は、自分は地獄耳を持っているのかもしれないと思った。

思わず聞いてしまった女子の影口。

女子はこういうのが非常に多い。

そして、なによりものすごく面倒くさい。

これは柚奈が特定の親しい人物をつくらない理由の一つでもあった。

「お前が風紀やんのかよ」

ふいに桐の笑い声が聞こえた。

図書の男子に漣聖斗の名前を書き終え、柚奈は振り向いた。

「えーだめー？」

「だめっていうか、無理だろ。その格好じゃ」

桐は蓮を指さした。

蓮は制服の第二ボタンまで開け、赤いネクタイもゆるゆるで、今日は前髪を結んでアップにしている。

その風貌は少し不良っぽくて、でも彼のおおらかで陽気な性格にはとてもよく似あっている気がした。

「じゃ、俺保健になるー！」

あんな不良っぽい奴が委員に入るのか、と柚奈はかなり不思議そうに思った。

周りの人も意外に思っているらしく、あちこちで蓮に向けた声が飛び交っていた。

「ハイ、三国蓮」

桐は後ろを向いて柚奈に囁いた。

その顔にはまださきほどの笑顔がうつすらと残っており、こんなクールな奴でも普通に笑うんだな、と柚奈は思った。

しかし、声にも表情にも出さず柚奈は無言で黒板に書いた。

そして一通り立候補で枠はだいぶ埋まったが、まだところどころ空きがある。

そこでしばらく相談の時間を設け、立候補を募ることにした。

しかし、柚奈は席に戻ることはできず、話し相手もないまま美依の方に目をやった。

美依は前と同じように、楽しそうに蓮と聖斗と喋っている。

別に避けていたわけじゃないのか。

じゃあ、何で前のように一緒に弁当食べたりしないんだろ、と柚奈は疑問を抱いた。

もう美依も蓮も聖斗も委員に入っているので、相談する必要も無く、雑談を楽しそうにしている。

柚奈はよくわからないまま、頭をかいた。

「なーなー、環境って何すんのー？ 柚奈ー」

とある男子が柚奈を呼んだ。

柚奈はふと目をあげ、ワックスで髪をたてた少し悪ぶった風貌の男子に答えた。

「えーそんな詳しくは書いてないけど、ドブ掃除とかすんじゃないの」

「ドブ掃除って限定ですか」

「え、それ以外に特に思いつかない」

「いや、まだあるでしょ！ 何か！！」

クラスがどつと沸き上がる。

柚奈も自然に笑い、大きな声で言った。

「あ、でもあれじゃない？ 掃除カッターになったときとか残って掃除したりさ」

「それ、美化係じゃね？」

「あーじゃ、あれだ。花壇に花植えたりすんじゃないの」

「なんか柚奈ってデメリットしか言っていないよな」

「委員にメリットなんてねーよ。デメリットしか存在しないさ」

「おつ、名言！」

クラスから拍手の混じった歓声と笑い声が沸き上がる。

柚奈も同時に笑っていた。

久しぶりに男子と喋った気がする。

あの男子は猪田という、前の中学が一緒だった男子だ。

柚奈が「イノダ」を「イモダ」と聞き間違えた事から、とても仲が良くなった。

とはいうものの、柚奈は中学が同じ男子なら誰とでも仲がいいのだが。

「へえ、猪田って星野と仲いいんだ」

「てか、あいつ優等生に見えてわりと活発ボーイだぜ」

「BOYじゃねーよ、GIRL」

ネイティブな英語の発音に、おーっと歓声があがる。

柚奈は自然と微笑んだ。

そして黒板の方を振り向いた。

「はい、イモダ環境決定」

「は？！いやいや、俺まだやるなんて一言も言っただけー！」

「ハイ何にも聞こえない」

大きなクラスの笑い声と、猪田の悲痛の叫び声が聞こえる。

柚奈もくすぐすと笑いながら黒板にイモダのフルネームを書いた。

「てかイモダって何？」

「いや、それがさー中1のときに」

たちまち柚奈はクラスに溶け込んでゆく。
これも毎年の事だった。

クラスには溶け込むが、深入りはしない。
広く浅く、それが柚奈の友人関係だった。

クラスがざわめいている。

環境は猪田で決定し、もう本人も諦めていた。

まだ二つほど委員に空きがあるので、クラスではそれについての話が飛び交っている。

さきほど決まった保健の女子の名前を黒板に書いているときに、背後で声が聞こえた。

「ピアニスト？」

ふと手をとめ振り向くと、至近距離で桐がこちらを見ていた。

そして、桐は柚奈の指を指差した。

「指、長いし筋肉ついてる。ピアニスト向きの手……っていうか、ピアニストになるための指だ」

柚奈はぽかんと口をあけたまま桐を見つめた。

しかし、桐もそれ以上は何も言わず、じっと柚奈の指を見ている。

「ああ……うん、ピアノしてたから」

「ふーん」

それだけ言うと桐はふいと顔を背け、前を向いた。

そして何事もなかったかのように、委員決めを進行し始めた。

柚奈は思い切り顔をしかめた。

え、何コイツ。

たまにいます。

クラスに一人、柚奈でも親しくなれない人物が。

予想外の事を口にして、予想外の行動をするような人が柚奈は苦手だ。

何を考えているのかさっぱりわからないと、こちらもどう接していいかわからない。

こいつはもしかしたら、その部類に入るかもしれない。

柚奈はさっそく桐に苦手意識を感じ始めた。

桐の綺麗な横顔を睨んで、柚奈はふと美依の方を見た。

美依はまだ和葉達と楽しそうに喋っている。

柚奈は何となく、ため息をついた。

第7話

テイル・テラー

「今日早速放課後委員会かあ」

美依が掃除の時間にため息をついた。

モップをうごかしてはいるが、これは掃除をしているうちに入らない。

しかしわりと新しいこの校舎は、モップがけの必要が無いようにも思える。

元が綺麗なのでモップがけをしても全然掃除をした気にならないので、男子はほとんどサボっている。

教室の掃除を真面目にしているのは柚奈を含めた数人程度だ。

「多分、私の方が遅くおわるから先帰っててもいいよ？」

「うっん。待ってるよ」

美依はにっこり笑った。

最近、美依とは一緒に帰っている。

とはいっても、わりと早く別れてしまうので途中までの話だ。

美依は柚奈から離れる気配を全く見せない。

今まで、柚奈は特別親しい人物をつくらなかった。というか、つくろうとしなかった。

しかし、いつだって新学期の方では今回の美依のように、自然と一緒に行動する人が現れる。

でもいつだってその子も自然と柚奈から離れ、群れるのが好きな女の子のグループへ行くのだ。

だが、美依は全く離れる気配がない。

美依は、可愛いしすごくフレンドリーなので、どこのグループも受け入れてくれるはずだ。

美依とは特に共通点も無いし、柚奈にこだわる理由も無い。

別に美依が嫌いなわけではないから特に構わないのだが、美依が『親友』という存在になっていく気がして、それにどうしても抵抗があった。

「愛須さん」

すると、教室の端で数人の女子が美依を呼んだ。

確か、美依を呼んでいるのは冬辺という女子だ。

美依は一度柚奈の方を見たが、モップを壁にかけてその女子の方へかけて行った。

何だ。

美依はあのグループに入るんだ。

ほっとしたような、でも何故か少しさびしい気もした。

でも、そんな小さな寂しさなど、じきに忘れてしまうものだ。

柚奈は美依から目をそらし、ちりとりを拾った。

「柚奈、ごめん。私、今日やっぱり先に帰る」

帰りの会が終わった後、ふいに美依が柚奈に言った。

柚奈は少しきよんとしたが、別に理由を聞くわけでもなくすぐに

こたえた。

「あ、そう？うん、いいけど」

美依はどこか、困ったような表情で微笑んだ。
柚奈は眉間にシワをよせた。

美依が少し、変だ。

いつも無邪気に笑うのに、どこか笑顔を取り繕っているように見える。

とりあえず柚奈は美依に手を振り、美依は同じ図書委員の聖斗と一緒に教室を出て行った。

すると美依が教室の扉を閉めたと同時に、柚奈の肩に手がおかれた。
ふと振り向くと、そこには桐が居た。

部活用のエナメルバッグを肩にかけてはいるが、野球部のユニフォームに着替えてはいなかった。

「委員、職員室横の会議室だつて」

「ああ、そう……着替えなくてもいいの？」

「ああ、多分もう練習行けないから」

「ふーん」

「星野さん」

ふいに顔をあげると、教室の後ろの扉から女子が数人こちらを見ていた。

柚奈を呼んだのは、あの掃除時間にもいた冬辺という女子だった。冬辺は柚奈に手招きをしていた。何か用だろうか。

「先、行つとくけど」

「うん」

そう言つて桐は教室を出て行つた。すると、それを見た冬辺達も教室の後ろの扉をしめ、柚奈に歩み寄つてきた。

その顔には微笑みが浮かんでいたが、数人いることからあまりいい話ではない気がする。

しかし、柚奈は微笑みを取り繕つた。

「何？ちよつと私、委員会があるから短めをお願いね」

「うん。別に、用つてわけじゃないの。ちよつと、星野さんのためにいい事教えてあげようと思つて」

「何？」

面と向かつて何か気に入らない事でも言われるのかと思つていた柚奈は、少しほつとして肩の力を抜いた。

しかし、いい事ではなさそうだな、と柚奈は何か来るものに向けて心を構えた。

「星野さん、美依ちゃんと仲良くしてるみたいだけど、やめた方がいいと思つわよ」

「どうして？」

柚奈は眉間にシワを寄せた。
すると、冬辺は微笑んだ。

「だって、美依ちゃん言ってたもの。星野さんの悪口」

「！」

柚奈は目を見開いた。

まさかそんな事を言われるとは思っていなかったので、正直驚いた。
冬辺はまだ続けた。

「如月くんと親しくなろうとしてるとか、如月くんと親しい自分の事邪魔に思ってるとか」

「そんな事……」

反論しようとして言うのをやめた。

この場所に本人がいるわけじゃないのに、反論したって意味がない事を柚奈は経験から知っていた。

柚奈は大きいため息をついた。

そしてうつむいていた顔をあげた。

夕焼けにはまだ早く、空は青々しさが残っている。

別に、こんな事はじめてだったわけじゃないし。

今までだってたくさんあったじゃないの。

でもやっぱり、そういう事を聞くと何度経験したって心は傷つく。
人に嫌われたんだから、当たり前前の事だ。

だが、美依が自分の事をそう思っていた事に全く気づかなかった。その分、シヨックが大きかったのかもしれない。

「ああ、そう・・・わざわざ忠告ありがとう」

そう言つて、少し、重い足取りで柚奈は教室を出た。

そのとき、柚奈は驚いた。

扉のすぐ隣に、桐が壁にもたれかかっていたのだ。

「・・・・・・・・何してんの」

「別に。気分変わつて、やっぱり待つてる事にしただけ」

そう言つて桐は足元のエナメルを拾い上げ、肩にかけた。

柚奈は眉間にシワをよせ、桐を見た。

もしかして、教室でのやりとりをずっと聞いていたのだろうか。

柚奈は無言で、桐の少し後ろをついていった。

「では、これから第一回学級委員会を始めます」

輪のように並べられた席につき、まわってきた紙を見た。なんとなく小さくため息をついて時計を見る。

もうすでに4時半をまわっていた。

やはり、図書委員よりも遅くおわりそうだ。

あ、そうだ。

美依そういえば先に帰ってるって・・・

そういえば、今思えば美依のあの変な態度はそういう事なのかもしれない。

冬辺の言っていた事は、どうやら事実らしかった。

まあ、別に今までだってこんなことあったし。

また一人に戻るだけ。

それに、一人っていったって友達ならたくさんいるし。

柚奈は紙に目を戻した。

学年の学級委員長を決める事と、新学期早々にある研修についてだ。柚奈は大きいため息について目を閉じた。

「それでは、各学年で話し合い、学級委員長と副委員長と書記を決めて下さい」

柚奈は話し合いの輪の中にいるだけで、会話に参加しなかった。隣に座っている桐も同じようで、聞いているだけのようだった。柚奈はふと、今日桐に言われた事を思い出した。

ピアニスト？

あれはいつたい、何だったんだろうか。

確かに昔、柚奈は本格的にピアノをやっていて、指に筋肉もついている。

柚奈はふと桐の、シャーペンを握る指を見た。

あ、こいつもだ。

桐の指はどれも長く、小指に筋肉がついていた。
小指は非常に筋肉のつきにくい指で、それに筋肉がついているということは特別に鍛えたという事だ。

こいつも本格的にピアノをやっていたのだろうか。

「何」

「いや？」

柚奈がじつと桐の手元を見ている事に気づき、桐が言った。
柚奈はすぐに目をそらしたが、桐が話を続けた。

「英語が堪能なのは、幼少のときにピアノで海外を飛び回っていたから？」

「は？」

柚奈は思わず聞き返したが、桐はそれ以上何も言わない。
それに、桐の言っている事は当たっていた。
柚奈は少し、間をおいて考えたが、小さくうなずいた。

「そうだけど」

「どうしてやめたんだ？」

普通そこ聞か、と思い柚奈は少し顔をしかめた。
しかし桐はそれに気づいているのか気づいていないのか、態度を変えない。

「別に……いろいろあつて」

「へえ」

「そついうあなたこそ、何でやめたの」

桐は驚いたのか、目を見開いた。

しかし、やはりクールなのは同じであまり表情には出ていない。
桐は少し間をあけて言った。

「……………何を」

「ピアノ」

「どうして？」

「小指に筋肉がついてる。あなたもそれで私の事を見破ったんでしよう？小指に筋肉がついている人は、たいていピアニストだから」

桐は無言で柚奈を見つめた。

そしてふいに目をそらし、手もとの紙を見た。

そしてつぶやくようにぼそぼそと言った。

「別に……いろいろと」

「自分だつてそうなんじゃない」

柚奈はふん、と息をついて顔をそむけた。

すると桐はシャーペンを器用にくるくると指でまわしながら、言っ

た。

「・・・・・・・・十八番は？」

「は？」

「何が好き？曲」

柚奈はしかめっ面のまま、桐の顔を見つめた。

何なのコイツ。

何を突然言い出すのかと思ったら・・・
本当、全然考えてることわかんない。

柚奈は言おうか迷ったが、少し警戒したまま言った。

「B？nir de naissance・・・・・・・・生誕の祝福」

「『人生』の第一楽章？弾けるのか？」

「はぁ？弾けるも何もこの曲は・・・・・・・・」

何かを言いかけて、柚奈は口をつぐんだ。
危なかった。

危うく、言ってしまうところだった。

「何？」

「何でもない。で、あんたの好きな曲は？」

「好きっていうよりも、得意なのはAurora、夢のカーテンだけれど……どうせ知らないだろ」

「知ってるわよ。馬鹿にしてんの？」

すると桐は今度はさきほどより驚いた顔で柚奈を見た。

柚奈は手元の紙を見つめながらため息をついたが、その時ふとある事に気づいた。

「あれ、でもその曲って正式発表されてないんじゃないの？」

「じゃあ、何でそれをお前が知ってるんだ？」

「や、それこっちのセリフだし」

互いに意味不明なまま、無言で見つめ合った。

お互いに「何こいつ」と思っているのは互いにわかっていた。そのとき、柚奈の思考回路の先に光が点いた。

「……えッ、嘘でしょ？」

柚奈は目を見開いて、啞然とした。

こいつと、昔会った事がある。

いや、会ったどころでは済まない。

出会い、一緒に曲を作ったり、連弾したりした。

自分と対等に連弾ができるのは、こいつだけだと思っていた。

そいつが今、目の前にいる？

「あなた、Le meilleur pianiste d'un mondeの……」

「やっぱり、お前」

再び互いに無言になった。

驚きすぎて何を言っているかわからない。

互いに同時にため息をついた。

こんな事があるなんて。

柚奈は、十年ぶりに昔の記憶が蘇った。

見たこともないほど大きなホール。

ぴっちり満員で、客はステージからでは米粒ほど小さく見えた。

そして、弾き終わった後の大歓声。

その歓声が、ピアノとはまた違った美しい迫力のある『音楽』であると感じたあの舞台。

私は、世界一のピアニストだった。

第8話

追憶ピアノシモ

「えー、あのあとすぐにピアノやめたんだ？」

「まあ、いろいろあって」

窓の外はうつすらと残った橙色の空と、淡い青色が入り混ざっていた。

日の光ももう廊下には入ってこなくなり、電気のついていない廊下は薄暗かった。

誰も残っていない廊下を、二人桐と並んで歩く。

まさかこんな奴と意気投合するなんて思っていなかったけど。

「てか、お前もあのあとすぐ？」

「うん。まあね」

「へえ……俺はてつきり、まだ続けてるものだと思ってたけど」

「私だって。私がいなくて事は、桐は世界一じゃない」

「お前がいたって、どうなってたかわかんねーし」

「何それ？宣戦布告？」

足音しか響かない廊下に、笑い声も混ざって響く。
階段を降りて、靴箱に出たところでふと、人影が見えた。

「桐！遅かったなあ」

「あれ、隣の女の子はもしや」

そこにいたのは蓮と聖斗だった。

どうやら桐を待っていたらしい。

蓮と聖斗は桐に笑顔で手を振った。

「お前等、別に先に帰ってもよかったのに」

「何言ってるんだよ桐ちゃん」

「待ってますよ。別に用事ありませんし」

桐は言葉は冷たいけれど、思い切り笑っていた。

柚奈も自然と微笑む。

桐の第一印象は、間違っていたのかもしれない。

柚奈はそう思った。

「柚奈も一緒に帰る？」

蓮がひよこつと桐の肩にアゴを乗せてニコツと笑った。

柚奈はすぐにうなずいた。

その柚奈の姿を、靴箱の反対側で聞いている人が数名いた。

柚奈達はそれに気づく事なく校舎を出て行った。

柚奈と桐達は、三人とも徒歩通だったので歩道を並んで歩いた。もう完全に日は暮れ、月が見える。真夜中とそう変わらないほどの空の色。洗濯物、いれてくれているだろうか。

「へー！昔の知り合いだったの？」

「そう。私も桐も、海外でピアノの演奏活動をしていたの」

「親同士が親友らしくて、よく会ってた」

「え、じゃあなんで2人ともこんなところにいるんですか？」

それを話すとずいぶんと長くなる。

柚奈は母の影響で、幼い頃からピアノを習っていた。

才能があつたのか、その腕は大人をも凌駕し、海外でその実力が認められるようになった。

幼い頃は、海外にいた記憶しか無い。

それぐらいに、海外での演奏活動は忙しかった。

だから柚奈は幼稚園や保育園は行っていなかったのが事実だ。

桐とは、母親同士、父親同士が中学からの大親友で頻繁に会っていた。

桐も母親の影響でピアノをやっていて、桐も同じくピアノの才能を認められて海外を飛び回って演奏活動をしていた。

二人とも『神童』なんて呼ばれてもいた。

互いに周りに同年代で専門的な音楽の内容を話せる人がいなかった

ので、桐とはすごく気が合った。

また、世界で最も難関なコンクールと言われているフランス・パリで行われるクラウティール・ファガロー国際コンクールは、年齢制限が無いことで非常に有名だ。

そのピアノ部門で、桐は2年連続史上最年少で優勝していた。つまり、事実上の世界一だ。

そして今まで全くコンクールに出た事のなかった柚奈は、知人の勧めでそれに出る事になった。

そして何と、柚奈は優勝した。

桐は2位だった。

1位、2位を日本人の子供が独占という事で当時音楽界ではかなりの話題になった。

それが5歳のときで、翌年は小学校入学だったのでそのコンクールを区切りとして、柚奈は一度日本に戻る事になった。

その帰りの飛行機が、事故にあったのだ。

エンジントラブルで両翼のエンジンが機能停止状態に陥り、水上着陸を試みるが失敗。

その事故で生き残ったのは乗客百五十八名中、たった数名。

その中の数名が、柚奈だった。

柚奈は奇跡的に生還したが、両親は死んだ。

それが柚奈がピアノをやめた理由。

いや、やめたというよりも、やめざるを得なかった。

柚奈に親戚はいなかった。

日本には、まだずいぶん幼いので長旅は無理だと判断した両親が

知人に預けていた双子の弟がいた。

柚奈は一人で、弟達を育てなければならなかった。

海外になど、一人で行けるはずも無い。

ピアノなど続けられるはずも無い。

「まあねー。いろいろあつてピアノはだいぶ前にやめたの」

「俺も」

「へえ、もつたいなッ」

蓮は叫ぶように大きな声で言った。

目の前にはまだ昼の光が残った薄明るい夜空の中で細い三日月が浮かんでいた。

星もまだちらちらとしか見えない空を柚奈は見上げた。

「帰ったら久しぶりに……弾いてみようかなあ」

「ただいまー……って洗濯物いれてくれないじゃん!!夕飯もできてないじゃん!!」

「そんな事言われても俺等だってさつき帰ってきたばっかなんですし」

柚奈はスクールバッグを階段に放り投げ、リビングの大きな窓を開

け放した。

サンダルをはいて外に出て、庭に干してある洗濯物を室内へ放り込む。

「えー、何で？もう6時半過ぎてんじゃない。部活？」

「ううん。委員会。俺も和音も学級委員選ばれた」

和葉はカッターシャツの袖をまくりあげ、制服のまま夕飯の支度をはじめようとキッチンでごそごそやっている。

和音はおそらく洗面所に電気がついているので、着替えているのだろう。

それにしても、和葉も和音も学級委員か。

正直言つて、想像できるようなできないような。

確かに二人とも、両親の顔も見ずに育ってきたせいかなりしっかりしている。

私にちよっぴり似たりしたのかなーなんて自意識過剰か。

柚奈はリビングへ戻り、窓を閉めると靴下を脱いでソファへ寝転がった。

「ちよっと姉さん、靴下ちゃんと洗濯機の中入れといてよ」

「はいはーい」と

寝転がったままりモコンを足で器用にとり、上へひょいと投げて右手でキャッチした。

適当にチャンネルをまわしていると、音楽番組がふと目にとまった。近頃話題になっているシンガーソングライターだ。

キーボードでバラードナンバーを弾き語りしている。

ふと今日の出来事を思い出す。

そういえば、と柚奈はソファの背もたれから顔をだした。

リビングと隣接するように、引き戸で仕切られているとある部屋がある。

そこには、グランドピアノがあった。

この家には防音設備が整っており、この引き戸を全部開け放すと、たちまちリビングはコンサートホールへと変わる。

とは言っても、曲などとうの昔から弾いていないのだが。

「あーつかりた。今日はもうゲームできそうにないね、和葉」

「何で俺にふるの」

「わー今日の夕飯はオムライスだー」

洗面所のドアが開く音が、テレビを見ながらも聞こえる。

和音は相変わらずテンションの低い声で棒読みのように言う。

そう言われてみると、これはどうやらチキンライスの香りのようだ。急にお腹が減る。

「てか姉さん、靴下」

「はいはいわかってますー」

うちは家事が係分担されている。

主に料理は和葉、掃除・洗濯は和音だ。

正直言って、柚奈は特にする事は無い。

しいて言うならば会計だ。

まだ弟が幼かった頃は、家の家事はすべて柚奈がこなしていた。しかし、弟が年頃になると家の家事を手伝うと弟の方から提案してきた。

それから徐々に家事は弟達が主になってゆき、いつしか柚奈のする事は何もなくなった。

きっと、弟達も柚奈の負担がわかっていたのだろう。

幼い頃から自分たちを姉としてではなく、親として育ててきてくれた苦労を理解しているのだろう。

両親を亡くしたのは二人がだいぶ幼い頃だ。

きっと両親の顔も声も覚えていないだろう。

今となつては感謝の言葉など口にするところを想像できないぐらいに育ってしまったが、何も言わないながらも理解しているのだろう。

「うつあー疲れた」

「姉さん着替えてよ。まだ制服じゃん。手も洗ってないでしょ。いただきますさせないからね」

こういう弟の発言を聞くと、どっちが親なんだかわからない。

弟はどちらもしっかりしている。

やはり、私の育て方がよかったのか。

夕飯も食べ終わり、弟達は自分の部屋にいる。

普段はテレビでも見ているのだが、今日は宿題がたんまりと出たらしい。

一方で柚奈は、久しぶりにリビングの隣の部屋にいた。

ピアノを前にするのは、久しぶりではなかった。

音楽界に復帰する事などありえないのに、衰えたくなかったのだ。

幼いながらに、世界一というプライドだけはあったのかもしれないけれど、曲を弾いたことは無かった。

曲を弾く勇気がなかった。

曲を弾くと、ピアノを弾く楽しみを思い出しそうで、またピアノを弾きたいという強い想いがこみあがってきそうで怖かった。

戻れないのに、戻りたくなりそうで。

ポン

ドの鍵盤を叩く。

聞きなれた音が、今日は新鮮に聞こえる。

久しぶりに、曲でも弾いてみようか。

そうはいっても、楽譜は無い。

どんな曲があったのか、すっかり忘れてしまっている。

得意なのはAurora、夢のカーテンだけど……

ふいに桐の言葉を思い出した。

桐は作曲が得意でAurora、夢のカーテンも桐が作曲した曲だった。

一方で、私は即興が好きだったので、一度作曲した曲を覚えるのが苦手だったし、作曲は好きだったが作品としてつくった事は無い。

桐がピアノを弾く事を仕事だと認識していたのかわからないが、少なくとも柚奈は遊びとしてピアノをやっていた。

Aurora、夢のカーテンを桐が作曲したときに、柚奈はその場所

にいた。
柚奈が桐に頼んだのだ。

流れるような綺麗な曲をつくって、と。

桐はあつという間につくってくれた。

指を上手く使うテクニク面では桐の方が技術は上で、Auror
e、夢のカーテンは非常に高度な技術が必要で、事実上存在するピ
アニストの中で桐しか弾けなかった。

Auror e、夢のカーテンは曲として難しすぎたので、作品とし
て発表はされなかったのだ。

でも柚奈はその曲が好きだった。

自分に弾けなくとも、聴いているだけですごく楽しかった。

柚奈が唯一、作品として作曲した曲がある。

いや、柚奈はつくろうと思ったのではなく、いつものように即興で
自由に、そのときの柚奈にとっては適当に弾いていた。

それを、知らぬ間に桐が楽譜に書きとめていたのだ。

それがLa route de la vie、人生だ。

その第一楽章がB ? nir de naissance、生誕の祝
福だ。

これも非常に難しく、なによりも音が非常に多い。

柚奈は迫力のある強い曲が好きだったので、すごく音が多かった。

これは作品として発表されているのだが、この曲も柚奈にしか弾け
ないといわれていた。

現在もどうなのかは知らないが、ピアノとして弾かれることはなく、
オーケストラなどでつかわれていると聞いた。

柚奈はゆつくりと鍵盤に指をのせた。

そして、ふいに弾き始めた。

Auror e、夢のカーテンを。

昔のピアノばかりだった日々を思い返すと、思い浮かぶのは自分の
つくったLa route de la vieではなく、Aur
oreなのだ。

ふいに指がとまる。
やっぱり、ここか。

昔も、いつも同じところで指がとまっていた。
やっぱり、この曲は桐にしか弾けないな。

ふいに柚奈は微笑んだ。
懐かしい。

すごく、懐かしい。

まだ、感覚を覚えていた自分に少し感激した。

「姉さん、風呂先入るよ」

素早く後ろを振り返る。

ピアノに夢中になって、和音と和葉が一階に降りてくるのに全く気付かなかった。

柚奈はピアノの蓋を閉めた。

「一番風呂はお姉さんって昔から決まってるでしょ！」

柚奈はお風呂場へ走って行った。

その後姿を、黙って二人の弟は見送った。

和音はアイスクャンディーをなめながら、テレビのスイッチをつけた。

「……姉さん、何かあったのかな」

「何って何」

「知らないけどさ」

和葉はゆっくりとピアノの部屋の扉を閉めた。
そして、息をついた。

「でもま・・・楽しそうに弾いてたから大丈夫なんじゃないの」

和音はソファの背もたれから上半身だけ起き上がって、アイスクヤンディーの棒を和葉に差し出した。

「何」

「捨てて」

「嫌だよ」

ちえーと和音は口をとがらせながらソファから起き上がった。
和葉もソファに座り、和音はゴミ箱にアイスクヤンディーの棒を放り込んだ。

お風呂場からは、柚奈の鼻歌がかすかに聞こえる。

さつき弾いていた、名前は知らない流れるような綺麗な曲だ。
和音はテレビの音量を上げた。

第9話

スレチガイ

運動場から、野球部のランニングの掛け声が聞こえてくる。

優しい柔らかな朝日が、ほのかに机を照らす。

暖かな春の教室は、居心地がいい。

誰もいない朝の教室で、柚奈は席について一人本を読んでいた。

その時、教室の扉が開く音がした。

「あ、星野さん。おはよう」

「あ・・・おはよう、冬辺さん」

柚奈は微笑んだ。

入って来たのは、冬辺とその他の女子数人だった。

だが、冬辺さんの顔を見た瞬間、昨日の出来事を思い出した。

心の中で少しの寂しさと、いつもの事だとそれを紛らわそうとする自分がいた。

冬辺の背中を目で追う。

そういえば、桐に最初の日に自己紹介してたっけ。

もてるんだなあ、桐も。

そのとき、再び教室の扉があいた。

ふと柚奈が振り向くと、そこには美依がいた。

どくと心臓が脈打つ。

美依も同じような事を思っているのか、柚奈の方を見てはいるが声は出さない。

柚奈は唾を飲み込んで、無理矢理微笑んだ。

「美……」

「美依ちゃん、おはよう！」

ふと横を見ると、冬辺達が席から立ち上がって美依の方へ駆け寄った。

教室の扉の近くで、冬辺が美依を囲んで楽しそうに話している。

柚奈は、無理矢理つくったえくぼを消した。

そして小さくため息をついて本に目を戻す。

そっか。

美依は冬辺さんのグループに入るんだね。

柚奈は微笑んだ。

これもいつもの事。

ただ、いつもの日々に戻るだけ。

それを教室の外から見ていた者が二人。

互いに顔を見合わせたが、小首をかしげて教室の中へ入ってきた。

「おっはー柚奈」

「おはようございます」

「あ、おはよう。二人とも」

柚奈はふと本から顔をあげた。

そこにはエナメルのバッグをぶら下げた蓮と聖斗がいた。

柚奈はしおりをページに挟み、本を閉じる。

「朝練は？てか、二人とも何部？野球部？」

「野球部は桐だろ。俺はバスケ！」

「僕はサッカーです」

「へえ、仲いいのに3人とも部活違うんだ」

「仲はいいけど、やりたい事は違うつて感じかな」

聖斗が微笑む。

群れる女子とは絆の固さが違う。

そういう女子は、必ず同じ事を一緒にしたがる。

部活だつてそうだ。

離れたくない。それは、離れたら何かが壊れてしまいそうという不安の表れ。

群れる女子も、心の底ではわかつてる。

この絆が、簡単に壊れてしまう事を。

「わりと俺ら、自由だもんな。お互いに。いつも一緒にいるけど、何でも一緒つてわけじゃないんだぜ」

この三人は、離れていても互いを信じあえている。

これこそ、理想の友情なのではなからうか。

柚奈はほおーと感心した。

その点、自分はどうかだろう。

ふと美依の方を見る。

美依は、相変わらず教室の隅でわいわい騒いでいた。

あんなに私にひつついていた美依も、実は私の事好きじゃなかったんだなあ。

なんとなく感傷にひたっていた柚奈の頬を、蓮がつついた。

「俺さー、最初柚奈は俺らの事が苦手なのかなーって思ってたんだぜ」

「そうそう。会話にも入ってこないし」

「ああー・・・なんというか、常時ハイテンションなグループが苦手なんだよね。あと、モテてる人とかも苦手」

「ふーん？じゃあ、美依も苦手なんだ？」

柚奈は目を丸くした。

何故、そこで美依がでてくるのかわからなかった。私と美依が、親友だとも思っていたのだろうか。

「え、別に？あれはその、美依の方が・・・」

ふいに言葉が途切れる。

何と言っているのかわからなかった。

はつきりと断言はできないが、おそらく事実。

でも、曖昧に仕入れた情報を簡単に口にしていいものかと柚奈は迷った。

いや、きっとそうではない。

美依が自分の事が嫌いだと、自分の口から言ってしまうと完全にそ

れが真実だと思い知ってしまうからだ。

自分は弱い。

群れる女子が嫌いだとか、女子同士の面倒くさい絆が苦手だとか、そういうのも全部含めて私は、逃げているのかもしれない。

「へえ、今日柚奈と全然話してないんだ」

箸をはきながら桐が言った。

そういえば今日は朝から二人が喋っているところを見ていない。

休み時間も、美依はまだ名前の憶えていない女子達と喋り、柚奈は一人で本を読むか、桐達3人としやべっていた。

弁当も、柚奈は桐達と共に食べた。

そういえば、と昨日の教室での出来事を思い出した。

だって、美依ちゃん言ってたもの。星野さんの悪口。

ふと、桐はあの女子の言葉を思い出して、美依の方を見る。

こういう女子の面倒くさいトラブルには何度か遭遇してきたが、どれも桐はあまり深く関わらないようにしてきた。

美依はモップの柄にアゴをのせて、ゆらゆらと揺れている。そして大きなため息をついた。

「ほら、ため息なんかついてないで愚痴終わったんなら自分の掃除場に戻れ」

「嫌だあ。柚奈とはちょっと気まずいし、教室戻ったらそれはそれ

で杏奈・・・冬辺さん達に呼ばれるし」

「嫌いなのか？そいつの事」

「嫌いじゃないけど・・・信用できないっていうか・・・やっぱり外国でいろいろあったから私、人間不信なんだよね。軽く」

よく人間不信なんて言葉知ってたな、と桐は思った。

ここ短期間で美依のボキャブラリーは急激に増幅しているように思えた。

「経験から言つてああいう子は、何か些細な事でもきっかけがあれば、すぐに私を裏切るよ」

可愛い顔をしてまたこいつはシビアな事を、と桐は何気に美依の髪をひっぱる。

美依は頬をぷうとふくらませて桐の手をふりはらった。

「そこまでわかるもんかよ。断言はできないだろ」

「断言するよ！言語道断つてやつ？」

「いや、違うな」

あれ、と美依は照れ隠しで首をかしげた。

「女子なんてほとんどそうだよ。これは考えすぎかもしれないけど、もしかしたら私に近づいたのも桐や蓮や聖斗が目的だったりするかもしれないし」

桐はちりとりを拾いあげてふと思い出した。

如月くんと親しくなろうとしてみるとか、如月くんと親しい自分の事邪魔に思ってるとか。

あの女子の言葉だ。

確かに、あの女子は美依の言うとおり、典型的な『女子』なのかもしれない。

美依は信頼できる友達が欲しいのだろう。

海外で活躍する天才バイオリニストの自分では手に入れなかった、友達、親友が。

ただの女子高生となった今も、まだ海外でのいじめに対しての敏感な感覚は捨てられないのだろう。

「柚奈は何となく・・・他の人と違う感じがしたんだけどな。柚奈の目は、いつも真実を見通してる感じがしたの」

「ふーん」

それは何となくわかった気がした。

まだ柚奈が昔の知り合いだとわかる前から、柚奈の雰囲気は他の女子とは違った。

誰とも普通に話すし大きな違いはなかったが、どこか群れるのを嫌う傾向があったように思えた。

女子は群れるのを好む。

桐もなんとなくそれは知っていた。

ただ柚奈は違う。

たいていの女子は、桐や蓮や聖斗を他の男子とは違う鼻屑した目で見ると、柚奈はそうは見なかったようだった。

しかし桐はそこまで敏感には感じ取らなかったが、美依は細かいと

ころまで感づいていたらしい。

「違ったのかな．．．．．柚奈は、私の事が嫌いみたい」

「．．．．．そうなのか？」

桐はちりとりの中のコミを、ゴミ箱にさらさらと流すように捨てた。これで廊下の掃除は一通り終わったが、美依はまだ帰りたくないようだ。

桐はちりとりを足元に置き、箒をもって壁にもたれかかった。

「杏奈ちゃんが．．．あ、冬辺さんがね。柚奈が私の事嫌いって言うてたって、教えてくれたの」

桐は眉間にシワをよせた。

昨日の出来事と、どこか矛盾している。

少し考えて、ああ、なるほどそういうことか、と桐は前髪をかきあげた。

「最初はちよつと信じられなかったっていうか、柚奈がそんな事言う人に思えなかったから．．．．．けど、なんとなくわかる気もしたの」

桐は相槌すら打たず、ただ美依のいうことに耳を傾けていた。

「なんとなく柚奈は私を．．．．．受け入れていなかったっていうか．．．．．」

「．．．．．へえ」

チャームになる。

あと5分で、帰りの会が始まる。

桐は壁から体を起こした。

「気は済んだか？溜まっていた愚痴はもうおしまいかな？」

「こっちは真面目に話してるの！」

美依はぶうと頬をふくらませた。

桐は教室の後ろの扉をゆっくりとあけた。

美依は後ろで少し、入りづらそうにしている。

しかし、見たところ柚奈は美依は掃除をさぼったことに対して特に不満を抱いている様子ではなかった。

ただ、いつものように席に腰かけて本を読んでいる。

「ま………どっちにしろ、お前次第じゃないのか」

「何？」

「お前が冬木の言う事を信じるのか、柚奈の言う事を信じるのか」

「冬辺だよ、桐」

桐はふーんとそれだけ言って、箒を片付けにさっさとどこかへ去って行った。

美依はモップの柄を握ったまま、扉にゆっくりもたれかけた。

冬辺達は、窓辺でわいわいとさわいでいる。

箒を片付ける桐と、後ろからちょっかいをだしている蓮と聖斗を見て、頬を赤らめうれしそうに話をしている。

一方で柚奈は席に座って一人物静かに本を読んでいる。

ふと、目にとまったのが柚奈の持っている書物だった。

よくみるとそれは本ではなく、何かの冊子だった。

すると背後から桐達が柚奈に声をかけていた。

四人で仲良さそうに話している。

私がいるときは、柚奈、桐達と話したがらなかったのに。

私がいなかったら、あんなに楽しそうに話してる。

そのとき、本鈴がなった。

美依はあわててモップを片付けにかけて行っった。

第10話

GIRLS vs GIRL + GIRL

「へーえ。なるほどね。だからなんとなく仲悪いんだ、今」

「仕組みれてるんですね、上手い事」

和葉はポテチの袋に手をつ突っ込んで、もう残り少ない事がわかると一気に残りのポテチを口の中に流し込んだ。

聖斗はソファに腰かけて、キッチンにいる桐を見ながら言った。
桐は3人分の紅茶を入れながら、柚奈と美依の事を話していた。
ここは桐の家のリビング。

3人とも制服のまま、放課後の学校帰りだった。

「まあ、そう珍しい事じゃないだろ。女子の間では」

「でしょうね。でも、何も言っただけじゃないんですか？桐は気づいたのに」

「別に。俺は関係ねーし。当人2人の問題だろ」

「でも、桐が教えてあげたら二人とも仲が戻るかもしれないのに」

「自分で解決しないと、本当に解決したことにならないんだよ。わかるだろ？」

「ま、そうだな。ちゃんと根っから解決させなきゃまた同じ事が起きるかもだし……てか、まだポテチ無い？」

桐に頭をはたかれ、蓮は聖斗のひざの上ですてーんとわざと寝転がった。

聖斗は笑いながら、桐の入れた紅茶を飲んだ。

「それじゃ、僕等は傍で見学といきますか」

ここ最近、まともに柚奈と話をしていない。

いや、一度もだ。

私は杏奈ちゃん達と一緒にいるし、柚奈はたいてい一人か桐達と一緒にいる。

席も前後ろだから話す機会などたくさんあるだろうに、一度も話をする事はない。

杏奈ちゃん達と話すのもとても楽しいけれど、どこかで何かがひっかかる。

心の中の奥底にある不安が消えない。

いじめられたときのあの記憶が、『友達』に対する判断力を必要以上で鋭くさせる。

いや、そもそも友達に判断など必要なのだろうか。

こついうのはもう知らないうちになっているものなのだと、ドラマや漫画は言う。

強いていうならば感覚だろう。

自分に合うか、合わないか。

一緒に楽しいか、楽しくないか。

信頼できるか、できないか。

どっちにしろ、お前次第じゃないのか。

桐の言葉を思いだす。
そうだ。

まだ、はっきりと柚奈から聞いたわけじゃない。
私の事が、嫌いだと。
でもやっぱり、杏奈から聞いた事を完全に否定する事はできなかった。

杏奈から聞いた時期と、柚奈が美依を少し避けるようになった時期がちょうど一致していた。
それに、前々からなんとなく柚奈は美依を、心の奥までは行かせないように見えない壁をはっているようにも見えていた。

「美依ちゃん」

ふと後ろを向いた。

すると、まっさきに目に入ったのは後ろの席の柚奈だったが、美依を呼んでいたのはその向こうにいる杏奈だった。

美依は立ち上がって、杏奈達がいる廊下へ出た。

すると、席からは見えなかったが、杏奈の後にはいつものメンバーが数人いた。

みんなニコニコというか、ニヤニヤしているその表情を美依は敏感に感じ取った。

「美依ちゃんさ、昨日の掃除時間ずっと如月くんと話してたんでしょ？」

「え？ああ、うん」

「そういつの、やめた方がいいと思うよ。見られたらまずいし」

「どうして？」

美依は少し頬をこおばらせた。

杏奈はちらちら周りを気にしながら言った。

「だって、如月くんのモテようは知ってるでしょ？如月くんと仲良くなんかしたら女子をみんな敵にまわすことになるわよ」

「ほら、だって今星野さんが如月くん達と仲良くしてるじゃない」

「もうこのクラス的女子ほとんどに反感かわれてるわよね」

美依は眉間にシワを寄せた。

やっぱり、杏奈達もそうだったか。

落胆と失望が、美依の瞳に映っていた。

この人達は違う。

私の親友となるべき人じゃない。

この人たちは一緒だ。

私をいじめたあの子たちと、同類だ。

美依はふいと後ろをふりむいた。

そしてすたすたと教室へ戻った。

杏奈達がまさか美依が自分たちに失望しているなんて露知らず、不思議そうに美依の背中を見つめていた。

そしていつもより早足でまるで急ぐように自分の席についた。

席についたとたん、急に激しい憤りを感じた。

あまりの怒りに、握った拳が震えている。

どうしてみんなあなの？

どうしてみんな自分の事しか考えないの？

どうしてみんな私を自分の為に利用しようとするの？

思わず涙腺が緩み、目に涙があふれる。

けれど、絶対に泣くまいと美依は目をぎゅっとつむった。

それでも涙は閉じた瞼からにじむようにあふれてくる。

美依は泣いてると思われたくないと、机に顔を伏せた。

涙が出てくるのは悲しいからなのか？悔しいからなのか？

心の中がごちゃごちゃになる。

こんな事なら日本なんかに戻ってくるんじゃないか．．．

自分の腕に顔をうずめたまま、美依は小さくつぶやいた。

「手伝おうか」

ふと後ろを振り向くと、そこには箒を持った桐がいた。

柚奈は抱えている机を決まった位置に配置して、手をぱんぱんとはたいた。

「廊下はもう終わったの？」

「ああ」

「それじゃ、お願い」

桐はざっと教室を見渡す。

今の席は男女の数が班ごとに非常に偏っており、教室掃除は全員女子だった。

しかし、ほとんどの女子は窓辺や黒板前で屯って本来は綺麗にしなければならぬ黒板に落書きをつけたしたり雑談をしたりしていた。掃除をしているのは柚奈だけで、他の女子は見向きもしていない。桐は運ぼうとした机を再びその場に置き、黒板前に屯っている女子に声をかけた。

「なあ」

「あッ、如月くん」

女子は驚きと照れが混じった表情で桐を見つめた。

そして慌てて黒板の相合傘の落書きを消す。

心なしか消される前、「きさら」という文字が見えた気がしたが、特に問いはしなかった。

「教室掃除大変だから、ちょっと手伝って欲しいんだけど・・・」

「あッ、うん！ごめんなさい！」

それを見ていた窓辺の女子もそそくさと机を運び出した。

桐はその姿を見て、小さくため息をついた。

すると、隣で見ていた柚奈は何が可笑しいのかふきだした。

「すごい権力をお持ちなんですね」

「一応、学級委員だし？」

こいつは真面目に言ってるのかそれともただかわしているだけなのか、と柚奈は桐の顔をじつと見つめた。

桐は教室をきよきよと見渡して、何かを探している。

「美依は？」

「美依？さあ」

柚奈は全く関心がなさそうに、教卓に頬杖をついている。

桐はその横顔の表情をじつと見つめた。

何を思っているのか読み取れない、無表情に近い表情だった。

「美依の事、嫌いなのか？」

「別に」

柚奈は即答した。

教卓の上にあつた出席簿を開いて、眺めている。

「どっちかっていうと、嫌われてるみたいだし。私」

「ふーん」

桐は黒板消しを手にとって、完全には消されていないうっすらと見える落書きのあとを綺麗にしながら言った。

少し沈黙ができる。

そして何気に柚奈が言った。

「私、親友とかつくらないから」

「……………ふーん」

あえて聞き返しはしなかった。

なんとなく、柚奈は群れるのが嫌いなのはわかっていたからだ。理由もそれと同じなのだろう。

「美依みたいに学期の最初の方で一緒に行動するような子なら、今まで何人もいたよ。でも、すぐにどこかのグループに移っていく」

柚奈は出席簿をめくっている。

まだ書かれていないはずの6月のページをなぜかじつと見つめている。

「女子はどこかのグループに所属しないと不安になる生き物なの。仲間が多ければ多いほど、安心する。絆の固さは、目に見えるものだと思うてるわ」

「ああ」

桐は相槌だけ打った。

柚奈はあいかわらず、6月と7月のページをいたりきたりしていた。

「美依も、冬辺さん達のグループに移っていった。それだけよ」

「……………それは、どうなのかな」

柚奈は出席簿のページをめくる手を止めた。

10月のページが後ろから見えた。

何も書かれていない、白紙のページをじっと柚奈は見ていた。

「どうして？」

「美依はお前が思っているほど強くない」

柚奈は無言で10月のページを見つめていた。

教室は、机を運ぶ音と飛び交う雑談でかなり騒がしい。

けれど、桐と柚奈の間には沈黙があった。

「私もよ」

柚奈は微動だにしていない。

声だけが、彼女の背中から聞こえてくる。

「私も、あなたや美依が思っているほど強くない。いつも曖昧な場所に立っていて、逃げてばかりいるわ」

「何故？お前は、好かれているのに。お前が望めば、親友だって」

「親友は、つくろうと思つてつくるものじゃないわ」

「でも、つくりたくないと思えばつくることはできない」

机はほぼ運び終わり、聞こえてくるのは女子の雑談だけだ。

柚奈は11月のページを開いた。

当然、白紙で何も書かれていないのに、柚奈はじっくりそのページを見つめていた。

「私は、強い絆で人と結ばれたくないの。いつか、別れの時が来る。それはきつと突然で、望んでいなくとも必ず」

柚奈は出席簿を閉じた。

まっすぐ前を向く。

目頭に熱い何かが込み上げてきた。

そう。

別れは突然やってくる。

何も告げずに、運命はやってくる。

どんな小さな別れでも、もう悲しみたくない。

私は一生分の別れを、まだ何もわかっていない幼い頃に経験した。

幼い頃からずっとその運命を背負い続けて、今ここにいる。

どんなに軽い運命でさえも、もう私は背負いたくない。

もう鮮明には思い出せない、微笑む両親の姿がうつすらと脳裏に蘇る。

柚奈は眉間にシワを寄せ、桐の方へ振り返った。

「私はもう、悲しみたくないの」

桐は強い意思表示をする柚奈をじつと無言で見つめた。

あれから何があったのかは知らない。

ピアノをやめた理由に、それと関係する深く暗い何かがあったのかもしれない。

自分の様なくだらない理由ではなく、やめざるを得なかった決定的な理由が。

「悲しみ」とはそれなのだろう。

触れてはならないと感じ、桐は聞きたい何かを口にはしなかった。

「親友つてのは……その悲しみも一緒にわけあえるような、そんな存在だと思うけど」

柚奈は顎をひいて桐を見つめ、ほぼ即答に近い速度で答えを返した。

「私の言う悲しみは、深い悲しみさえも一緒に乗り越えて行けるような大事な人が、居なくなった時のその悲しみをもう私は負いたくないと言っているの」

再び二人の間に沈黙が走る。

互いに見つめあっているのか睨み合っているのかわからないが、視線は交わっていた。

そのとき、教室の扉が開き、蓮と聖斗が現れた。

「美依がさつき杏奈って女子と一緒に体育倉庫の方行ってたんですけど、体育館倉庫って掃除場所になってましたっけ？」

桐と柚奈は思わず目を合わせる。

柚奈は桐がうなずくより前に、乱暴にドアをしめて廊下をかけていった。

「なんだなんだ？」

よくわかっていない蓮と聖斗の腕を握って、桐も柚奈のあとを追って走った。

「私が嘘をついたって言いたいわけ？」

体育館倉庫につくと、倉庫の裏から冬辺の声が聞こえた。

陰からそつと覗くと、背後に5人ほど女子を従え、完全に喧嘩を売っている。

「別にそうとは言っていないじゃない……でも、本当に柚奈がそう言ったかって聞いているの」

柚奈は目を見開いた。

まさか自分の名前が出てくるとは思わなかった。

背後にいた桐達の目が、柚奈に一瞬向いた。

「だから、私が嘘をついたって言いたいんでしょ？」

「……ええ、そうよ」

美依は渋々と認めるように言った。

冬辺は抑揚をつけるように大きな声で言った。

「どうして？ 私は美依ちゃんの為を思って知らせたのに、それってひどくない？」

冬辺が悪戯に微笑む。

あきらかに場は冬辺の方に傾いている。

冬辺は相当女子同士の言い合いに慣れているようだった。

美依は黙り込んでいる。

「何か言ったらどうなの？」

美依は唇をぎゅっと結んで、拳を握っていた。
思いきり冬辺を睨む。

「……知ってるんだから。杏奈ちゃんは、桐と親しい私が嫌いなんでしょ？」

冬辺の表情からずっと笑顔が消える。

「ちよっと、何言ってるのよ」

「だから、私と柚奈を離して、それから私と仲良くするフリして裏切るつもりだったんでしょ？」

冬辺は奥の奥まで見抜かれていたのが驚きだったのか、眉間にシワを寄せて美依を睨んだまま言葉を探していた。
沈黙が訪れる。

するとそのとき冬辺が、後ろに立っている女子から何かを渡された。
冬辺はそれを手に持ったまま、美依に歩み寄った。

「あんた生意気なのよ！！バイオリンだとかずっと海外にいただとか、気取ってんじゃないわよ！」

冬辺は持っていた上が開いた牛乳パックを美依に投げつけた。

美依はとっさに腕で顔をかばったが、牛乳を頭からかぶり、髪も服もびしょびしょになった。

美依は反動で思わず、後ろに尻もちをついた。
その姿を見て、冬辺は嘲笑った。

「日本語が喋れないって、今まで充分喋ってんじゃないのよ。そうやって如月くんと一緒にいる理由こじつけてるだけでしょ？」

「はあ？何言ってるんのあんた」

桐と蓮と聖斗は思わずぎょとした。

柚奈がいつの間にか、美依と冬辺の間に立っていた。

冬辺は少し驚いたが、思わず微笑んだ。

「別々に呼び出すつもりだったのに、手間がはぶけたわね」

「生意気なのはあんたの方でしょう？こんなに意地汚くて醜いあんたなんて、桐の眼中にもないわよ」

「はあ？ちよつと如月くんと仲いいからって調子のとてんじゃないぞー！」

「柚奈！」

背後で柚奈を呼ぶ小さな美依の声が聞こえた。

しかし、柚奈は返事を返さないまま、冬辺を睨んだ。

冬辺はもうひとつ持っていた牛乳パックの上を両手で乱暴に開いた。

「うぜえんだよ！」

そして、柚奈にふりかざそうとした瞬間、がっつと右腕を柚奈が掴む。そして柚奈は掴まれたままの牛乳パックを握りつぶした。

とたんに牛乳が、冬辺の頭に垂れ落ちる。

綺麗に結わえられた巻き髪のポニーテールが、白い牛乳でベトベトになる。

「そつちこそうぜえんだよ」

柚奈は低い声で吐き捨てたあと、頭にきている冬辺の顔が妙にイラついた。

ただのくだらない女子の喧嘩なのに、今までにないくらい何故か最高に腹立たしかった。

「今度美依に何かしたら五体バラバラに引き裂いてやつからな」

そう言つて、最後に冬辺の右頬を思いつきり平手打ちした。

心地いい音が、体育館倉庫裏に響き渡る。

あーあーあーと桐と蓮と聖斗は心の中でつぶやいた。

「ほら、立つて」

美依は半分嘔然としながらも、柚奈に手をひかれるままその場を振り向きもせずに去った。

柚奈は美依の手を握ったまま、無言で体育館まで歩いた。

そして無言のまま、美依を更衣室のシャワーまで連れて行った。

「牛乳臭いでしょ。洗っておいで」

美依はうなずいて、シャワー室の個室へ入った。

柚奈は扉へもたれかかった。

思わずため息をつく。

自分があんな女子同士のケンカに参加する日が来るとは思っていなかった。

女子同士の喧嘩は、互いに自分の利益の為に邪魔な者を罵り貶め合うあまりにくだらないものだと思っていた。

今までに何人ものそれを、見てきた。

そしていつも、幼稚で醜すぎると思っていた。

今は、自分が幼稚で醜すぎるそれに参加している。

柚奈はもう一度、ため息をついた。

「柚奈」

シャワーの水音と、美依の声が聞こえた。

「何？」

なぜかすぐに返事はかえってこず、柚奈はシャワー室の中の返事を待った。

すると、シャワーの音と同じぐらいの小さな声がつつすらと聞こえた。

「ごめんね」

柚奈は天井を見上げて、しばらく黙った。

そして立ち上がり、一番近くのロッカーに入っていた誰のかわからないが綺麗そうなタオルを適当に手に取った。

「開けるよ？」

「うん」

扉を開け、美依にそのタオルを投げた。

美依はそれを受けとり、赤字に黒で『I LOVE 庭球部』と書かれたタオルをじっと見つめた。

「……誰の？」

「さあ」

美依はふふつと笑った。

それは、最初に話した時と同じ無邪気な微笑みだった。
柚奈も思わず微笑む。

そして言った。

「私もごめんね」

美依は頭をふきながら、少し間をおいて言った。

「どうして？」

「なんとなく。言われたままじゃ、嫌だから」

美依は顔をこしこしとこすっている。

柚奈には、それが必要以上に力が入っているように見えた。
美依はタオルから顔をあげた。

その日初めて柚奈と目を合わせた。
そして微笑んだ。

「じゃあ……ありがとう」

柚奈も微笑んだ。

「いえいえ、どういたしまして」

ふふと互いに微笑み合う。

やっと、固結びされていた何かがほどけた気がした。
美依が体をふきながら、どこか安心していうような柔らかい声で言った。

「私ね・・・外国にいたときは学校ではずっといじめられて・・・ものすごく不安で、周りを疑ってばかりで」

「それは私もかもね」

柚奈は腕を組んで、壁にもたれかかっていた。
個室の扉が全開になっていたが、掃除時間なので、シャワー室には誰も入ってこないだろうという確信があった。

「今まで私、親友をつくらなかった。それは、怖かったのかも。私、幼い頃に両親をなくしてから、自分のそばから大切な誰かがいなくなる事が」

美依は黙って柚奈の話を聞いていた。

柚奈は誰かにこのことを打ち明けたのは初めてで、何故か少し緊張していたがそれもほどなくして消えた。

「でも私・・・美依とは親友になれる気がする」

「私も」

二人は互いに微笑みあった。
生まれて初めての感覚。
友情を、初めて心で実感した。

するとその瞬間、シャワー室の扉が開いた。

「ほら、美依の着替え持ってきてやつ・・・」

「ぎゃーーーーーーー」

「変態！！！」

美依は全力で扉を閉め、柚奈は啞然とする桐の顔面に強烈な平手打ちをくらわせた。

冬辺の時の倍以上大きな音がシャワー室に響き、桐は後ろへ数歩ふらふらと下がって叫んだ。

「痛ってーーーー！！！！！！」

「おッ、何おもしろそうなことやってんの？」

「これのどこがおもしろそうに見えるんだ！！」

後から来た蓮と聖斗まで柚奈に追い回される始末。

着替えて出てきた美依は、顔が赤く変色している桐を見て思わず噴き出した。

美依は桐のそばにそっと寄り添った。

「ねえ、聞いて。私、親友できたんだ」

「ふーん。それはよかったね」

「ふふ」

すごく嬉しそうに美依は微笑んで、追いかけまわされる蓮と聖斗を

眺めていた。

桐は横目で微笑む美依を見た。

これから騒がしくなりそうだ。

桐は自分の頬に触れた。

ヒリヒリとしみる痛さに、何故か微笑んだ。

第11話

FIRST BEST FRIEND

「今日はPartyだぁー！！！！」

「いえーい！！」

散りかけの桜並木の下で、柚奈と美依は互いにハイタッチしてスキップしながら声をあげた。

ただいま4時半。春なのでまだ日は明るいが夕暮れ時。

柚奈は美依と2人で下校中だ。

本当は桐と蓮と聖斗も誘ったのだが、3人とも部活があつた。

そして、このあと何のお祝いかはよくはつきりしていないがどこかでパーティーをすることになった。

「てかそのパーティーどこでやんのー？」

「えー、どこにするー？」

「え、決まってるじゃないんですか？」

おいおい、と柚奈は苦笑する。

そして赤信号で立ち止まったとき、ポン！と手を叩き、くるりと振り返って元気よく挙手をした。

「ハイ！じゃー私ん家あいてるよ！」

「お菓子は？」

「ある！！」

美依が盛大に拍手を柚奈に送った。
柚奈も美依も噴き出して笑い合う。
こうして、目的地は柚奈の家に決定だ。

「ただいまー」

「おじゃましまーす！」

扉の鍵が開いている。

おそらく、帰って来ているのだろう。

廊下の一番奥の部屋から光が漏れていた。

柚奈は美依を連れて一番奥の部屋へと入った。

「おかえり」

部屋に入ると、緑のＴシャツにトレーナーというラフな格好でソファに座っている和音がいた。
テレビのチャンネルをまわしていたが、柚奈以外の不審な物音に手をとめてこちらを振り返った。
そのとき、扉からひよこつと美依が顔を出した。

それを見て、和音は目を見開いた。

「……客？」

「ハイ！親友の愛須美依です！」

「あー……ども」

敬礼ポーズをする元気な美依に、和音はテンション低いまま軽く会釈した。

今まで友達を家に連れてくることなどなかった柚奈に、和音は驚いているようだったが顔には出ていなかった。

すると、洗面所の扉が開いて黒いＴシャツを着ている和葉が現れた。和葉も柚奈の背後にいる同級生らしき人物を見て、驚いているようだった。

「あ……友達？」

「愛須美依です！」

美依は再び敬礼をとった。

和葉は左手をポケットにつっこみ、お茶を飲みながら軽く会釈した。美依は敬礼を直したあと、ぎよつと目を見開いた。

「え、何？双子？」

「そうそう。こっちの緑が和音で黒が和葉。どっちも私の弟。前に弟いるって言ったよね？」

「姉さん、今着てるＴシャツの色で言ったって役にたたないよ」

「俺等、私服は共有してんだから」

「後日あったときに和音の着てるやつ俺が着てるかもしれないし」

「声までそっくり・・・!」

ほおーと美依はじつと冷蔵庫をあけている和葉の横顔を見つめた。

和葉は冷蔵庫に何もないとわかると、扉をしめて和音の隣に座った。美依は両手を口にあけて言った。

「同じ顔が二つ・・・!!」

「まーね。一卵性だからね」

「どっちが和葉くんでどっちが和音くんだったかもう忘れたよ」

すると、和音がくるつと美依の方を振り向いた。

美依はそれにきょんとした。

「愛須さんでしたっけ」

「あ、ハイ。何か？」

美依はにっこり微笑んだ。

和音はそれに決して微笑み返しはせず、クールに無表情を装ったまま言った。

「いつもうちの姉がお世話になってます。多分、てか絶対迷惑かけたり変な事したりすると思いますが」

「ちょっと和音！！あんたはいつから私の保護者に」

「あー今日もとある男子生徒に平手打ちくらわしてました。あと五体バラバラに引き裂いてやるとか言っていました」

「あーあーとても女子とは思えないね」

「でも姉さんにしてはまだましな方だよね。どこで習得したのか飛び蹴りとか回し蹴りとかしてくるからね」

美依は無邪気に笑った。

柚奈も、もーまったくつぶやいたが微笑んだ。

その様子を、和音と和葉はじっと見ていた。

そして、和音が和葉につぶやいた。

「姉さん、楽しそうだね」

「だね」

柚奈は美依とテレビに映る何かを見て笑い合っていた。

普段、和葉達に見せるのと同じかそれ以上の笑顔だ。

和音と和葉は顔を見合わせた。

やっと、姉さんも普通の女子らしくなったみたいだ。

和音と和葉はふっと微笑んだ。

「へーえ。柚奈って弟いるんだ」

翌日の教室。

蓮も聖斗も興味深々に美依の話を聞いている。

桐は本を片手に読みながらも、こちらの話に耳を傾けているようだった。

「柚奈に弟なんていたっけ」

「海外で活動してたときは、弟は日本に残ってたの」

「海外で活動？」

美依は首をかしげる。

柚奈は、自分が幼いころピアノで海外活動をしていた事や、クラウドティーフアガロー国際コンクールピアノ部門で優勝した事を話した。すると美依は目を見開いて驚愕した。

「嘘?!じゃあ、桐と同じじゃん!」

「え、柚奈も桐もそんなにすごいわけ？」

蓮と聖斗はぼかんとしてこちらを見ている。

美依はただただ、呆然としていた。

「じゃあ、桐の3連覇を阻止した人物って柚奈だったんだあ!わ、すごい!超偶然!!!てか世界一だし!!!」

「でも、そういうお前も世界一だろ」

「へ？」

「あ、そうそう。私、そのクラウティ「ファガロー国際コンクール」のバイオリン部門で優勝してるんだよ」

「えー？！美依もファガロー？！」

「私達超Destiny!!!」

柚奈と美依は手を取り合ってはしゃいでいる。

こうしてみると、ずいぶん前から親友だったように感じる。

本当にこの短期間に柚奈のまわりにはいろいろな事が起こった。

柚奈は無邪気に笑う美依に思わず微笑む。

楽しい。

学校生活でこんな事を感じる事などほとんどなかったろう。
本当に、楽しい。

「それじゃ、5月末にある京都研修について今日は話し合います」

桐は淡々と手元にある資料を読み上げた。

この5時間目の学活の時間で、この前の学級委員会で決めた京都研修について、クラスのみんなに伝え、そしてまた決める事がたくさんある。

研修かあ。

柚奈はどこか心の中で何か嬉しいような楽しいような、期待が膨らむのを感じた。

今までは、研修も修学旅行も全く興味は無かった。

群れるのが好きな女子が異様に盛り上がる行事だとは思ってはいなかった。

でも、昔の柚奈と今の柚奈では状況が違う。

この研修は、すごく楽しめる気がする。

こういうのを「わくわくする」というのだろう。

「京都の歴史・文化に触れ、それと同時に互いに親睦を深めよう」というのが今回の目的です」

親睦ならもう深まってるよ、とばかりに柚奈は美依の方を見る。

美依もこちらを見ていたのか、目が合い互いに微笑み合う。

本当に、今まで見下してきた群れる女子と今の私も同じなのかもしれない。

それでも構わないと思えるのは、本当に自分が変わったからなのだろう。

「まずはグループ分けをしたいと思います。1グループ6人ずつで男女3人ずつです」

とたんにみな、席を立ちあがり、思いきり教室が騒がしくなる。

班でいいんじゃないかと学級委員会で意見がでたが、今の班だと男女の数が偏るので自由にしたのだ。

やはり、女子は仲のいいグループごとに分かれている。

男子はそれなりにグループなどはないので、ジャンケンやダチヨウ

倶楽部の真似事をしているのが見えた。

そしてやはり、女子の目は蓮と聖斗と桐に集中していた。

1グループに男女3人ずつ。

という事は、桐と蓮と聖斗が同じグループになるのは誰もがわかっていて。

桐達と同じグループになる事を、このクラスの女子全員が強く望んでいるのが目に見えていた。

「あ、そうだ柚奈」

教室の端でイスにどかっとな腰掛け、鼻をほじりながら桐と柚奈が行きして行くのをぼけっとな見ていた赤センが思い出したように言った。

「お前どーせ美依となるんだろ？それならお前んとこのグループは女子2人な。このクラス35人で女子は奇数なんだよ」

「あー、了解です」

美依も聞こえていたのか、親指を立てて見せた。

柚奈は返事代わりに微笑んで見せた。

すると桐が資料から視線をあげて言った。

「どうせ一緒になるんだろ？」

「何が？」

「俺等」

一瞬、桐が何を言っているのかわからず柚奈はぼけっとなしていた。しかし、そのあとようやくなんとなく桐の言う事が理解できた。

「あー・・・いいの？」

「いや、みんな立ってるのに美依と蓮と聖斗は立ってないから、もう既に成立してんのかなって」

確かに、他の男女はわいわいとそれぞれの仲良しで固まってグループ決めをしているのに、美依達は座って雑談をしていた。

言葉を交わさなくとも、互いに同じグループになると思っているのだろう。

横では桐が、柚奈が返事をする前に用紙の1班の枠に柚奈達の名前を既書きこんでいた。

「痛いね。他の女子の羨望の眼差しが突き刺さってくるわ」

「俺、こういう男女混合のグループ決め嫌いなんだよ。女子が騒ぐから」

だろうね、と柚奈は相槌を打った。

これだけモテてりゃ、自分が女子に人気がある事を自覚せざるを得ないのだろう。

確かにこのモテようは尋常ではないからな。

「その点、お前みたいなのがいたら便利だよなー・・・お前と同じクラスになれてよかったよ」

「何？」

「いや？別に」

桐はふつと柚奈から目をそらした。

柚奈は不審そうに桐の见えない顔をじつと見つめる。

そつぽを向いている桐が、どんな表情をしているのか全く読み取れなかった。

桐は小さく咳ばらいして、何故か熱くなつた頬に手を当てた。

第12話

老人のセルフィッシュ

「だからね、これも何かの運命だと私は思うんだよね。だってそうじゃない。最高峰に君臨する世界一が三人もこんな無名の高校で出会うなんてね」

「はあ」

「だからね、今回の目的は歴史や文化に触れることですよ？君達なら、みんなを音楽の歴史にも触れさせることができると思うんだよね」

「はあ」

「だからね、君達三人にアンサンブルをして欲しいんだよね」

「………はい？」

職員室で、桐と美依と柚奈は呼び出しをくらっていた。

それも、もうそろそろ定年のおじいさん先生。

吹奏楽の顧問で、担当教科も音楽らしく、まだ音楽の授業を受けていない柚奈達は面識も無くよく知らなかった。

だから呼び出しをくらったときは理由が全くわからなかったが、この先生が今度の京都研修に同伴するという事だけは理解できた。

「大丈夫。向こうの旅館にはホールがあつてね、そこにピアノもある。バイオリンは持って行ってくれればいい。不要物にはならない」

「いや、まだよく何を仰ってるのかわかんないんですけど」

「要するに、研修で俺達がアンサンブルする時間が設置されてるってことですか」

「そゆことだね」

「え、何。私達に弾けつての？」

何故かこの先生は、私達が世界最高峰の音楽家だという事を知っていた。

というのも、この先生はこれでも若い頃は音楽家を目指すやる気と希望に満ち溢れた青年だったらしい。

ピアノでは全国2位、バイオリンでは全国3位に入った実力者なのだが、世界には全く自分の技術とセンスが通用せず挫折。

数年後に定年を控えた現在、特に何にも期待をせず今ではこんな名の知れない高校で音楽を教えている。

そして何気に新入生の名簿を見てみると、そこには忘れもしないところある伝説の音楽家3人の名前。

教師をしながらでも売れずともなんとか作曲・作詞活動は続けていた10年前。

日本の音楽界はあの頃が最盛期だった。

何といっても世界で最難関と言われる国際音楽コンクール、クラウティン・ファガロー国際コンクールピアノ部門で如月桐が史上最年少の4歳で2連覇をしていたし、その翌年も1位星野柚奈、2位如月桐という上位を5歳の日本人が独占という史上類を見ない快挙を遂げたのだ。

なのに、その2人とも翌年は大会には出場せず、それ以後音楽活動

も一切行わずに何も言わないまま音楽界を去った。

また、9歳の頃からクラウティ・ファガロー国際コンクールバイオリン部門に出場し、今まで6連続で優勝し続けている美依までもがしばらくの間、音楽活動休止を宣言。

もはや、これは音楽界では世界的に有名な話であり、伝説となりつつあるのだ。

そしてこの3人が居ない今、日本の音楽界も終わったと囁かれているのが現状である。

そして新入生の名簿に見つけたその伝説の3人の名前。

もちろん、最初はただの同姓同名かと思った。

しかし担任の赤田先生によれば自己紹介ではそれぞれがピアノ経験者だったというし、美依に関しては完全に公言していると聞くではないか。

先生は廃れていた自分の中の音楽生命に、希望が見えたと言う。

「私自身の音楽生命はとつくの昔に終わっている。だが、1人の音楽教師として、生徒達に世界に通用する音色を聴かせてあげたいと世界の音楽に触れさせ、導いてあげる事が、私の使命だと思ったんだよね」

自分達の登場が、期待する事もなかったこの先の人生に大きな希望を見せてくれたというのはとりあえず嬉しいのだが、演奏しろというそれに関してはいい迷惑だ。

だいたいこっちは音楽家としてではなく、一人の高校生として今を生きているのだ。

音楽界を去ったのにはちゃんとした訳があり、訳があるからピアノを弾かない。

その訳も知らずに弾けというのはあまりに無神経ではないか。

「ですが先生、私達はもう・・・」

「コンクールに出て優勝しろと言っているのではないんだよ。もう技術も鈍り、世界一の演奏はできないかもしれない。それでもただ、世界一の君達の演奏は、今だってまだ輝きを失ってはいないんだよ」

何を根拠に、と桐はため息をついた。

美依はちよつと困ったように、柚奈と桐の顔色をうかがった。

「それにしても先生、アンサンブルと言っても私と桐はどちらもピアノ専門です。連弾でアンサンブルをしろというのはですか？」

「普通、三重奏ならピアノとバイオリンとチェロと相場は決まっている。でも俺も柚奈もチェロは弾けない」

「それなら、如月さんと愛須くんの二重奏にでもしようかな」

「じゃあ、私は・・・」

「星野くんは、声楽もしていたと聞いている」

げつと柚奈は顔をしかめた。

この爺さん、マジで何でも知っていやがる。

美依は初耳のようで、柚奈の顔をまじまじと見ていた。

桐はそういえばそうだったな、と過去の記憶を思い返しているようだった。

柚奈は深くため息をついた。

柚奈は、母親の影響でピアノを始めたと言ったが、最初は声楽だった。

もちろん、声楽でもレッスンの先生に教わる事など何もなくはない。ど驚異のスピードで技術を吸収していった。

このままでは演奏会の招待や、コンクールの方から声がかかったりするのにも時間の問題だと思われていた。

そのとき、柚奈が目をとめたのはピアノだった。

要するに、柚奈は声楽よりもピアノをとったのだ。

それが何故だったのか、あまりに幼いころの話なので柚奈は全く覚えてはいない。

きっと、幼い子供ながらの感覚だったのだろう。

「そういえば、俺の作った曲に手当たり次第に適当な歌詞つけて弾き語りしてたっけな」

「ちょっとこの人は嫌だね、恥ずかしい思い出をほじくりかえさんなよ」

「ちょっと柚奈、口調がババ臭い」

「てことで、二人の伴奏に星野くんの歌でよろしくね」

先生はそう言って椅子から急に立ち上がり、スケジュール帳や授業の資料を脇に抱えた。

そして職員室に予鈴が鳴り響き、先生たちの出入りが慌ただしくなってきた。

おそらく、先生も次の授業に行こうとしているのだろう。

「ちょ、先生マジで言ってるんですか？声楽もピアノも一体何年前の話だと」

「俺もまだやるなんて一言も」

「私だって、バイオリンの活動を休止して今ここにいるわけで」

「じゃ、私は授業があるんで」

聞こえていないのか聞こえていないフリをしているのか、先生は老人という肩書きをちゃっかり利用しているように見えた。

そして先生はすっかり曲がってしまった腰をさすりながら職員室を出て行く。

その後姿を脱力した姿で三人は見送った。

「へー！じゃ、俺等の前で演奏してくれんの！」

「僕も聴きたいです。3人の演奏」

他人事だと思つて、と桐は大きいため息をつく。

柚奈はタコさんウインナーを箸でつかんで、数回目のため息をついた。

お昼休憩はみんな食堂か中庭など、それぞれが昼食を食べに出て行っている。教室にはほとんど誰もいない。

外からにぎやかな声が聞こえてくる中、たった5人だけで柚奈達は教室で弁当を食べていた。

「私に関しては演奏でもないけどね」

「演奏のうちに入るんじゃないの。それも」

「それって何。声楽って言いなさいよ」

「え、柚奈うたうんですか？」

「わー見ものだね」

蓮も聖斗も完全に柚奈達の演奏を聞くつもりでいるようだった。

桐と柚奈は同時にため息をついた。

そんな中、美依は卵焼きを口に入れてからぼつりと言った。

「でも正直、私はそこまで嫌じゃないな。強制なら仕方ないって思
つてできるよ。私の場合、バイオリンをやめたのはただ学業優先に
しただけから」

「まあ……そうだろうね」

桐はパックのお茶を飲みながら、つぶやくように言った。

柚奈も黙り込んで、箸をくわえている。

場に沈黙が訪れると、突然蓮が手をたたいた。

「ハイハイ！辛気臭いのはやめにしましょ！やりたくないならやら
なくてよし！って俺、全然関係ないけど」

「うん。全然関係ないね」

「関係ないのに偉そうだね」

「ちょ、あんま責めないで下さいよ。俺これでも結構ブローケンハ

「トだから」

わいわいと誰もいない昼休みの暖かい教室。

みんなと笑い合いながらも柚奈は、自分自身との問題はまだ解決していなかった。

ピアノをやめたのは、両親が死んで弟もいたし、生活との両立ができそうになかったから。

それだけだと思っていた。

だが実際にはきつと違う。

心の中で自分を責めてる。

自分がピアノをやっていたいなかったら。

自分がコンクールにでなかったら。

そしたらきつとあの飛行機には乗っていなかったんだと、両親は死ぬことはなかったんだとどこかで自分を責めてるんだ。

自分のせいでありながら、自分はこうして運良く助かっている。

そんな思いが、密かに心の奥底に眠っているのだと柚奈は薄々気づいていた。

だから曲を弾こうとしない。

それが本当の、ピアノを弾かない理由なんだ。

「どうしたんだろうね、姉さん」

「ね、どうしたんだろうね」

アイスクャンディーの棒をくわえ、和葉と和音はそう言いながらも

目はテレビ画面に釘付けになっていた。

リビングと隣接しているピアノの部屋の扉を全開にし、柚奈はピアノと無言で向き合っていた。

最初は二人も柚奈がピアノを弾こうとしている事に驚き、柚奈の曲を聴こうと息をひそめていた。

しかし、ピアノの前に座ったままじっと鍵盤を見つめているだけなので二人ともいつしかこうしてテレビを見ている。

「ピアノ弾かないのかな、姉さん」

「ね、どうしたんだろうね」

二人とも、台詞が完全に棒読みでやはり心はテレビの方へうつっているようだった。

柚奈に聞こえているのかはわからないが、和音はさらりと言った。

「正直もうどうせなら弾いて欲しくないよね。今いいとこなんだし、テレビの音聞こえなくなるの嫌だから」

「こらこら和音、そんな事ないよ。俺は聴きたいよ？姉さんの演奏」

とはいいつつも和葉もリモコンを手に取り、音量を3アップさせている。

お笑い番組の大きな拍手と笑い声は柚奈の元にも届いていた。

そして柚奈はため息をついた。

一体、どうしよう。

柚奈はレの鍵盤に、人差し指を添えた。

だが、一向にやる気は起こらない。

勇気が出ないだけなのかもしれない、という気持ちからどこか目をそらしている気もした。

柚奈達が演奏する事になったのは？ la distance
e la catharsis、カタルシスの彼方へ、だ。

これも昔、桐が作曲して有名になった曲で、幼い頃柚奈が勝手につけた歌詞は発表はされていない。

だが、柚奈自身は全く覚えていないのになぜか桐は完璧に覚えていた。

「何でって言われても、俺が弾いてたらお前隣でベラベラと適当に歌詞並べ立てて歌ってたじゃん。そりゃ印象に残るだろ」

桐はさらりと言った。

そうかなあ、と未だに納得できぬまま、桐から手渡された楽譜を見る。

そつえば私、歌うんだったなと目の前のピアノに目を移した。

何でピアノと向かいあってたんだ？私。

柚奈は一人で小首をかしげた。

だが声楽だって、絶対に音域も狭くなっているに違いない。

一応、雰囲気を感じ取るために弾いておくか。

深く息を吸い、呼吸を整えた。

何をこんなに緊張する必要がある。

こんな個人の問題で、桐と美依に迷惑をかけてはいけない。

「お」

背後で突然流れたしたピアノの音色に、和音は振り返り、和葉は素早くリモコンの消音ボタンを押した。

リビングに響くピアノの音色。

高い音の多い、悲しさが表現されたような冷たい曲のように感じた。もちろん、音楽に関しては全くの素人の和音と和葉はただただ姉の横顔をじつと眺めていた。

「本当に最近姉さん変わったよね」

「昨日来た美依とか言う友達の影響じゃないの。昨日姉さんめっちゃ美依って人について喋ってたじゃん」

「だよね。もう俺等軽く暗唱できるよね。愛須美依の性格や言動について」

ピアノを弾き続ける姉の姿を見ながら二人はつぶやくように言った。これで姉のピアノの音色を聴くのは2回目だ。

感動したとか、姉の別の面が見えたとかそういうのは全くと言っていいほど無い。

ただ、むしろ姉らしいというか、何でもこなす完璧な姉がそこにもあった。

決して和葉と和音の知らない姉ではない。

ただ少し、いつもの姉よりもピアノを弾く姉は哀しく大人びて見える気がした。

「……………この曲何分ぐらいかな」

「さあ…………クラシックがどのくらいあるのか知らないし。第何楽章とか言うしそれなりに長いんじゃない」

「わーそれ困るね。あと数分で終わっちゃうじゃん。アーガイル多々山のネタ」

口ではそんな事を言いながらも二人とも実はちゃんとわかってる。そこには決して和葉と和音では埋める事のできない『過去』という悲しみの空間がある事を。

和音はじつと姉の姿を見つめたあと、ゴミ箱にアイスの棒を投げ入れた。

第13話

月明かりの下で君に捧ぐセレナーデ

「そうだ！京都へ行こう！！！」

思いきりバスの中に蓮の声が響く。

その声に、ドツとバスの中は笑い声に満ち溢れる。

「いや、もう来てるし」

「わー枝垂れ桜がすごく綺麗ですね」

朝早い出発でほとんどの人がテンションが低く二度寝したりしているのに、バスの1番後ろだけ騒がしい。

左右の窓に2人ずつへばりつき、真ん中の桐はそれに呆れていた。

柚奈達が来ているのは歴史の文化溢れる京都。

低血圧なのか桐はとても眠そうだが、柚奈達は朝からテンションがあがったまま下がる気配がなかった。

「ここなんか秋めっちゃ紅葉綺麗なんだろうーねえ」

「だねー」

「あッ、あそこみたらし団子で有名な甘味処！！」

「グルメばつかですね、蓮は」

京都といえやはり紅葉なのだが、春の京都もそれはそれで美しい。辺りを見渡せば風情ある古刹が点在し、道行けばそこには石畳が広

がり、そばを舞妓や人力車が通り過ぎる。

迫力ある仁王門に、下を見下ろせば思わず足がすくむ清水の舞台。どれも教科書などでは伝わらぬ重い歴史を感じさせる。

しかしたいいていの高校生は古都の佇まいなどを真面目に見物するつもりはなく、それぞれの目はさっそくいい土産屋を探していた。

「じゃ、これから自由時間をとるぞー！あまり遠くへは行かず、時間厳守だ！」

「うーし、じゃさっそくあそこに有名な八つ橋の店が」

「蓮は食べ物ばっかだなーもー」

蓮を先頭にC組第一班は歩きだす。

蓮はあちこちで京都の和菓子を堪能し、一方で聖斗と桐は真面目に歴史の建造物の素晴らしさをしかと己の目で確かめていた。

柚奈はふと、きよろきよろしている美依に気づいた。

「どしたの？美依」

「え？ああ、私日本の歴史とか詳しくなくて・・・京都なんて来たの初めてなんだもん」

外国育ちの美依にとってはさぞ不思議な光景だろう。

まるで三百年ほど昔にさかのぼったような時代劇の様なこの外觀に、どうやら美依は感銘を受けているらしかった。

「すごいー！ね、柚奈これ見て！」

「美依ったらはしやぎすぎ」

美依は狒犬にまで深い歴史を感じている。

修学旅行で以前にも訪れたことのある柚奈はそこまで素晴らしさを感じる事はなかったが、やはり修学旅行のときよりも楽しみは遥かに感じていた。

美依はそんな柚奈の手を握り、いろいろなところへ足早に連れまわす。

「ね、コレ可愛い！」

「わ、ほんとだあ」

小さな土産屋で見つけたのは、毛糸で編まれた小さなリボンのキーホルダー！。

ふわふわのピンクのリボンと黄色のリボンは、可愛いながらもかすかに和の感じがあった。

美依はそれを見て目をキラキラさせている。

「ね、お揃いで買おうよ！柚奈！」

「あッ、いいね！それ！オソロだ！」

「OSORO？」

「あ、オソロっていうのはね・・・」

柚奈が黄色、美依がピンクのリボンを購入し、それぞれ携帯に早速つけた。

揺れる小さな黄色のリボンは、本当にとっても可愛らしく、ここでの思い出もたくさん詰まっていそうだった。

「あ、二人ともオソロですか？」

「聖斗」

美依は聖斗に嬉しそうに柚奈とのお揃いのキーホルダーを見せている。

ふと見ると、向かいの生八つ橋専門店で蓮が色とりどりの生八つ橋をほおばっているのが見えた。

柚奈がそれを見て苦笑していると、隣で桐が何かを見ていた。

「桐もお土産買うの？」

「いや・・・別に」

桐は眺めていたキーホルダーをさっと商品棚に戻してふいにどこかへ行った。

少しおかしい行動に柚奈は小首をかしげながら、桐が眺めていたキーホルダーを手にとって見た。

それは二つ入りのプレート型のキーホルダーで、二つのプレートにはそれぞれ穴があいており、二つ合わせるとその穴がハート型になるというものだった。

ハートというところから、おそらくこれはカップルものだろう。

実際に永久不滅だとか恋愛成就だとかなんたらと書いてある。

こういうものは信じない性質なのだが、このプレートは可愛いと柚奈は思った。

「でもこれってカップルもの・・・桐って付き合ってたのかな？」

桐は女子嫌いのイメージが強かったので、確認を取らずとも彼女は

いないものだと思っていた。

しかし、あれだけモテているのに彼女がいなくても普通に考えると変だ。

たとえ女子嫌いでも、高1にもなれば好きな人ぐらいいるだろう。そしてあの桐ならば、努力せずとも両想いになれるだろう。

ふと、その時目がいったのが、そのキーホルダーの隣にあったペアのネックレスだった。

それはストーン付きのスティックペアネックレスで、ゴールドとシルバーの細いスティック型の男性用アクセだった。

もちろん、女性でもいけるのだろうが、こういう男性ものをカップルでつけるのだろうか？

けれど、カッコいいなと柚奈はそのネックレスを手にとって見た。

そのスティックの裏にはheart-to-heartと書かれている。

以心伝心か。

柚奈は微笑み、そのネックレスを手にとった。

和葉と和音への土産にしよう。

以心伝心など、あの二人の為にあるような言葉ではないか。

それに我が弟ながらかなり美形でモテているあの二人には、アクセサリーがいいだろう。

柚奈はそう思い、そのネックレスを手に取り、レジへ向かう。

すると先ほどどこかへ行ったはずの桐がふと気づくと傍にいた。

じつと柚奈の手に持つネックレスを見つめている。

「・・・・・・土産？」

「うん。そうだけど」

「それ、ペアネックレスじゃないの？」

「うん。知ってるよ」

「お前がつけんの？」

はあ？と柚奈は聞き返しそうになったが、意外にも桐があまりに真面目な顔をして聞いていたので柚奈はむっと口をとがらせた。

「何が言いたいのか？私がアクセサリーをつけるように見えないって？」

「や、そういうわけじゃなくて」

「つけますよ！ばりばりつけますから！」

柚奈はふんとそっぱを向いてレジへ向かった。

桐はその後姿を見つめて何故か、小さくくそつとつぶやいて腹いせに空気を蹴る。

頭をかいて、ふとさっきのプレートのキーホルダーに目がいく。

ありがとうございました、という店員の声が背後で聞こえ、柚奈が立ち去る足音が聞こえた。

桐は再び、そのキーホルダーを手に取った。

「ごちそうさま」

「あーおいしかったですね」

満足そうに桐と聖斗は箸を盆に置く。

聖斗はふくれたお腹をさすりながら、満足のため息をついた。するとその隣で、桐と聖斗よりもとっくの昔にごちそうさまを言い終えた蓮がつまようじをくわえてどこか不服そうに寝ころんでいた。それを見て、美依が小首をかしげる。

「蓮、おいしくなかったの？」

「べつにー？おいしかったけど」

蓮は口をとがらせる。

一体、何に不満を感じているのかわからないまま柚奈と美依は顔を見合わせた。

それを見て聖斗は苦笑し、桐は呆れてため息をつく。

「蓮なら気にしないでいいんだよ別に。ただ腹が減ってるだけだから」

柚奈も美依も口をぽかんと開けて桐の言葉に耳を疑っている。

お腹がすいてる？

この旅館の料理は大人1人分で結構な量だったはずだ。

それに蓮は昼間食べ歩いて間食を大量に腹におさめているはずだ。

「こいつは今まで腹いっぱいになった事がないほどの大食いだから」

「え、そうなの？」

「でも弁当とか普通サイズじゃん」

「そりゃ毎日毎日満足の行く量を食べてたら食費やばいことになっ

「ちゃうし」

蓮は器用に口にくわえたつまようじをくるくると回している。
そして突然、大声を出したかと思うと思いつきり背伸びをした。

「さーっって！！空腹を紛らわすために風呂行くか！」

「入浴時間はまだでしょ」

「みんなまだ食べてるよ」

ぶうと再びふくれて蓮は壁にもたれかかってそっぱを向いていた。
そつえば、今思い返すと蓮の弁当は異様にボリユームのあるもの
ばかりはいつていた気がする。

油物がかなり多いが、その分野菜などももちろんたくさん入っている
ので栄養バランスは大丈夫なようだったが。

「前に近所にあつたバイキングの店3つ潰した事ありましたよね」

「まあ、本当に蓮が原因だったか定かではないけどな」

「でもどれも僕たちが行った数日後に閉店しましたからね」

思い出して何がおかしいのか聖斗は笑う。

尊敬を通り越してもはや恐ろしいなと柚奈と美依はいじける蓮の背中
を見つめた。

「風呂の後、各班の班長と副班長は班長会があるのから他の奴らよりも早く風呂から出るように！いいか、遅刻したら今夜は俺と同じ
布団だからな！」

ひえーと生徒達から笑い悲鳴の混じった声があがった。
ふっふっふと赤センは笑いながら部屋を後にした。

その後ろ姿を、あれはまんざら冗談でもなさそうだなと青ざめた顔で生徒たちは見送った。

「あれー、まだ誰も来てないじゃんよ」

柚奈はとある和室のふすまを開けた。

カーテンが全開だったので綺麗な月明かりが部屋に差し込み、電気はついておらずとも部屋がよく見渡せるほど明るかった。
しかし腕時計の時計盤はよく見えないので、今が何時かわからなかった。

「でも時間は合ってるはずだけど。俺等が早かったんじゃないか？」

「こんなことならもうちょっとゆっくり風呂入れたかもー」

柚奈は窓のそばに積み重ねられた座布団の山にぼーんと身を投げた。
ばたばた両足を動かしていると、柚奈の足の上に桐が腰かけた。

「重いー」

「ばたばたとはしゃぐな。埃が舞う」

むうと柚奈は顔を座布団にうずめた。

その様子を横から桐はじつと見つめていた。
電気のついていない暗い部屋で、沈黙が訪れる。

「……………電気つけないの？」

「お前がつけるよ」

「あとから入ったの桐じゃーん」

「普通まず最初に部屋に入った奴が電気つけないか？」

「でもし最初に入った人がつけなかったら次の人がつけるべきじゃーん」

再び体を上下に揺らしてはたばたしていると、頭をぱーんとはたかれた。

柚奈は再びすねておとなしくなった。

ふと部屋を見渡すと、畳に月明かりの逆光で柚奈と桐の影が映っている。

暗い部屋に心地よい沈黙、柚奈はうとうとと眠りに誘われていた。
桐が柚奈の生乾きの髪を手ですく。

柚奈はその感触に、思わず目がさめた。

そしてふと、昼間の事を思い出した。

「そーいえば桐って彼女いるの？」

「……………は？何で」

「だって、カップルもののキーホルダーじーつと見つめてたから」

「いたことねーよ。彼女なんて」

「えー嘘。すごいモテるのに？」

桐は柚奈のその問いには答えず、何故かじつと柚奈を見つめていた。再び沈黙が訪れる。

柚奈も問いを待っているのか、じーっと桐の澄んだ瞳を見つめている。

やっと沈黙に耐えかねたのか、桐が小さくほうつとため息をついて窓の外に視線をそらした。

「…………お前こそさあ」

「何？」

「ペアもののネックレス買ってたじゃねーか」

「うん」

素直で鈍感な返事に桐は頭をかく。

柚奈が桐の方を見上げたまま無言で桐の言葉の続きを待っているようだった。桐はしかたなく言葉をつづけた。

「お前こそ、彼氏いんの？」

「いないよ」

「じゃあ、何でペアのネックレスなんか」

「ああ、あれは別にそんな深い理由は」

「ふーん」

桐は無関心を装いながらも、しかしどこか安心したようにほっと安堵の息をもらす。

それが何故か柚奈にはわからなかったが、桐のやわらかくなった横顔は月光に照らされとても美しく見えた。

すると桐はごそごそとトレーナーのポケットから何かを取り出した。

「あ、例のブツ」

「ブツって何だ。ブツって」

桐がポケットから取り出したのは、昼間のペアのプレートのキーホルダーだった。

柚奈は思わずそれを手に取って、月明かりでまじまじと見た。

「わーコレ可愛い。ねえ見て、片方に『mutual』でもう片方に『affection』って書いてある。これって合わせて『相思相愛』って意味だよな」

プレートに斜めに筆記体で彫られた相思相愛の英語。

それぞれのプレートには穴があいており、二つを合わせるとハート型になる。

そして端に上品についているピンクと青色のラインストーンが何とも可愛らしかった。

「お前……そっいつの好きなの？」

「うん。すごい好き」

柚奈は何故か月光にプレートをかざしている。

柚奈は羨ましげにそのプレートを微笑みながら見つめている。

やっぱり柚奈も女の子だ。

可愛いものを見るとなぜか幸せそうな表情をする。

そして柚奈はしばらくした後それを桐に返した。

桐は、自分の手のひらの上に置かれたその2つのプレートをじっと見つめた。

「いいよ」

「え？」

「やるよ」

意味がわからないまま、柚奈は口をあけて啞然としている。

そして桐は、柚奈の手にピンクのラインストーンと『affect
ion』と書かれたほうのプレートのキーホルダーを握らせた。

柚奈は自分の手のひらの中にあるそのキーホルダーをじっと見つめた後、はっとした。

「ちょっと、ダメでしょ！これは桐が他の誰かの為に買った・・・」

「お前だよ」

柚奈の言葉が途切れる。

その場に沈黙が訪れる。

桐がすぐに「冗談だよ」と口の端に笑みを添えてそう言つのを心のどこかで待っている自分がいた。

けれど、そんな言葉は聞こえはしない。

桐の瞳は月明かりでいつもより澄んでいた。
その瞳のどこにも冗談など混じってはいない。

「元々、初めからお前の為に買ったものだよ」

そう言っただけ桐は差し出された柚奈の手を押し返した。

柚奈は押し返されるがままに、そのプレートのキーホルダーをただぎゅっと握りしめる。

「………嘘」

柚奈は思わず小さくつぶやいた。
全くわからない。

理解が追い付かない。

これがただのキーホルダーならもっと素直に喜べただろう。

でもこれは、ただのキーホルダーじゃない。

ペア用のキーホルダーであって、片方は今も桐の手の中にある。

この意味がどうしても理解できなかった。

柚奈は感受性が強い。

自分に好意を寄せている男子など、口には出さないがわかっていた。
相手の仕草や表情、話し方など様々な面から柚奈は細かい不自然な動きを見つけ、察してしまいが柚奈の変わった生まれつきの性だった。

でも、桐は全然予兆がなかった。
わからない。

桐の考えている事が、まるでわからない。

「嘘じゃねーよ」

ゆつくりと、こんな状況でも落ち着いた柔らかい声で桐は言う。

桐は柚奈の目をまっすぐ見つめている。

柚奈は頬に徐々に熱がこもっていくのを感じた。
顔が熱い。

「じゃあ……何で？」

もしかして、という予想を、そんなわけないという思いが掻き消す。
静かな沈黙がかきたてる緊張と気まずさ。

桐は照れているのか、それともどう表現していいのかわからず困ったように髪の毛をかいいた。

さらさらの猫っ毛。

最近の男子はほとんど髪の毛をワックスで逆立てているが、桐の髪は全くの自然体。

まあ、髪の毛がやわらかすぎてワックスをつかっても無意味なのだろうが。

などと変な方向へ意識が飛ぶ。

柚奈はあわてて我に返った。

桐はいまだ自分のボキヤブラリーの中から自分の言いたい事をうまく表現できる言葉を探していた。

眉間にシワをよせて、窓の外をじっと見つめて考え込んでいる。

そしてやっと見つけたのか、桐は満月から柚奈へと視線を素早く変えた。

「付き合わない？」

柚奈はただ微動だにせず、桐を見つめていた。

その言葉はあんなに時間を有して考え込んでいたわりにはあまりに単純であっけなかった。

それでもその言葉は非常に大きな意味を持つ。

なのにそれを桐は、頬を赤らめもせず真顔でさらりと口に出した。

柚奈はそのあっけなさにただ口をぽかんと開いていた。

桐はそのあと何も言わない。

柚奈の返事を待っている。

「いいよ」

自分でもびっくりするほど、感情のこもっていないあっけない返事だった。

あまりにも単純でスムーズすぎるこのやりとりにも、いろいろな感情は行き場を無くしていた。

こんな流れでいいのだろうか。

みんな、こんな感じなのだろうか。

柚奈が心ここにあらずという感じでいろいろと考えていると、気づくと桐の手が柚奈の頬に触れていた。

月明かりに照らされていた柚奈の顔に、影がかかる。

思わず息を止めたその瞬間、突然部屋の扉が勢いよく開いた。

「わーりわり！風呂が思いのほか広くてよー。ちょっとはしゃいでたら……ってん？」

赤センはガッハッハッハと大きく口をあけてベラベラとしゃべっていたが、すぐに部屋の異変に感づいた。

扉の外には柚奈と桐の靴があったのに、部屋に電気はついていない。よく目をこらすと、部屋には窓辺に立って何故か外の景色を眺めている桐と、少しおかしな格好で畳にねそべっている柚奈の姿が見えた。

「……………何してんだ？お前等」

「外の景色を見てただけです」

「畳の感触を実際に確かめていただけです」

赤センは眉間にシワを寄せる。

じーっと目を細めて柚奈と桐を見つめる。

そして赤センは大げさに息を呑み、口に手を当てた。

「まさかお前ら……トキメキあっていたのか……?」

「ちっ、違う!!」

「なわけねーだろ!」

二人の反論も聞く耳持たずで赤センはふっふっふーといやらしい笑みを浮かべて部屋にあがった。

そしてニヤニヤとして桐の肩を無言でバシッと叩く。

電気も付き、部屋に差し込んでいた月明かりと影も一瞬で消える。

そして赤センの後からはそろそろと他の班の班長も入ってきた。

そして普通に班長会が始まり、何事もなく進行していく。

柚奈と桐も、いたって普通に明日の予定について話し合った。

まるでさっきまでの出来事が幻だったかのように。

何が起こってたんだっけ？

柚奈は月夜に上書きされるように部屋の明るさが窓に反射して映る自分を見つめた。

第14話

布団の下での密会

「あ、柚奈おかえりー」

美依は広い部屋にずらりと並べられた敷布団の一番端の一つに寝転んで雑誌を読んでいた。

他の女子はそれぞれグループで固まって、トランプをしたり雑談をしたりしている。

どうやら美依の隣は柚奈の場所のようで、まだきれいに整えられたままの布団に、そばに柚奈の私物が置いてあった。

「どーだった？結構遅かったね」

「うーん……や、まあその……ちょっといろいろあってね」

美依は雑誌を閉じてほんとカバンの上に放り投げ、バツと足元に丸められていた布団を頭からかぶった。

そしてひょこつと横から顔だけを出して見せる。

柚奈はそれを見て笑い、自分も布団を頭からかぶって美依と向かい合わせに顔を出した。

「こういう研修の夜とかって、みんな恋バナするものなんだねー」

どうやら恋バナという単語や、そういうベタな常識についてもさきほどの雑誌から学んだらしい。

美依にとって雑誌は、好きなものというわけでも趣味というわけでもなく、日本での高校生としての過ごし方についての教科書みたいなものらしかった。

ファッションなども外国とはまるで違い、こういう研修などでの常識など数々載っている。

美依は日本に来てから数多くの雑誌を買い集め、またたく間に高校生としての常識を吸収していた。

「恋バナねえ。確かにしてるね」

上半身を起こして周りの人を見てみると、小さな声で囁きあってキヤーキヤーとピンク色の高い声をあげている。
きつと恋バナをしてるんだろう。

「美依は好きな人できたの？」

「うん」

柚奈はあきらかに頭の上に『?!』というマークが浮かんでいるような表情で目を見開いて美依を見る。

全く予想外の返事に柚奈は驚きを隠せず、言葉も出ない。
それをわかつているのか、美依は顔を布団で隠して奥でくすくすと笑っていた。

「えー?!美依、聞いてないよ」

「だって言っていないし、なによりさっきわかったことだもん」

「そーれーはー詳しく聞かねばなりませんな」

互いに布団を近づけ合って、顔を至近距離までよせ小さな声でも聞き取れるくらいに接近する。

美依はまだ恥ずかしがっているのか、顔を布団から出さない。

「で？誰？」

「えーもう聞いちゃうの？」

「だって気になるじゃん」

美依は目だけ布団から見せた。

目のすぐ下の頬が照れているのか赤く染まっている。

「・・・・・・・・・・聖斗」

「ひょー」

「何その声！」

バシッと柚奈は美依にはたかれる。

完全に布団の中にもつていながらどうやってはたいたのかはよく見えなかったが、照れいるだけあって結構な力だ。

柚奈はくすぐすと笑い声をこらえながら、また布団の殻に閉じこめる美依をつついた。

「何で？どこを？」

「んー・・・やっぱり優しいところかなあ。優しいっていったらそりや和葉も桐もだけど、やっぱり今まで同年代の子にあんなに親切にされたことなかったのもあるし・・・・・・・・んーよくわかんないけど」

桐という言葉に一瞬ドキツとしたが、何でもないふりをした。

美依は話すうちにますます頬が赤く紅潮していき、恥ずかしさに耐えられなくなつたのか再び布団で顔を覆った。

「で？で？どーすんの？言っちゃうの？」

「えーでもまだそんな事全然考えてないもーん！」

そっついながら美依は布団にくるまったまま右へ左へところどころと転がる。

その様子をおもしろがつて見ながら柚奈は笑っていた。

「そっかそっかあー、でもなんかわかる。雰囲気的にお似合いな気がする」

「そう？」

美依は嬉しそうに微笑む。

あの無邪気な笑顔とはまた違う、本当に女の子らしいなキュートな笑顔だった。

美依は可愛い。

きつとあのモテモテの聖斗でもきつと、実現する気がする。

「で？柚奈はどうなのさ」

「へ？」

「へ？じゃないよ。私も教えたんだから、いないとかナシだよッ」

美依は頬をぷつつと膨らませてやっと顔全体を布団から出して柚奈を足でつつつく。

柚奈の脳裏にふと、桐の顔が浮かぶ。

そして同時にさっきの出来事も思いだす。
そして思いっきり頬が真っ赤に染まった。

「あッ、絶対いるでしょ！」

「えー好きってゆーかさー」

友達とこんな話するのは初めてで、胸がすごくドキドキ高鳴っている。

柚奈も恥ずかしくてバツとさっきの美依のように布団を頭からかぶってしまった。

美依はそんな柚奈を、布団から出てバツと上にのしかかった。

「おらー吐けー」

「わー吐く吐く全部吐きますー！」

ぷはつと柚奈は布団から顔を出した。

美依は聞き逃すまいとするっと身軽に柚奈の布団に入りこむ。

美依は小学生並みに小柄なので美依が入ってきてもそこまで狭くは感じなかった。

そして下唇を噛んではにかみながら、小さな声で言った。

「えーとね・・・私の」

「桐でしょ」

柚奈は次に続く言葉のまま口をあけてぽかんとした。

美依は悪戯に微笑む。

「何で?!」

「えーだってそんな感じするもーん」

「美依ったら一体何者」

「でも絶対聖斗も蓮もそう思ってるよー」

「え?! 嘘」

「好きとはまだ感じてないかもだけどー、多分いずれ付き合う事になるだろーなーみたいな」

付き合う、という単語に柚奈はドキツとした。

それに気づいたのか、美依がにんまり笑って柚奈をこづく。

「何かあったの?! もしかして」

「いや、実はさ」

「何々?」

布団の中で、美依の耳に先ほどの出来事を詳しく囁く。

布団の中というのは、小さな声でも予想外に声がこもってよく聞こえる。

数回、近くに人がいないか確認しながら柚奈は事を話した。

すると、それを聞いた美依の顔が強張ったようなほころんだような、驚きと笑みの混じった顔で思わず叫んだ。

「うつそーーーーー！！あの桐が・・・」

「シーツ！！！！美依！！！！Be quiet！！」

美依はしまったと口を押さえ、素早く布団にもぐりこむ。

取り残された柚奈は、部屋にいた女子全員の視線を浴びていた。

柚奈は少し頬を桃色に染めて、そそくさと美依の後に続いて布団にもぐった。

布団にもぐったあと、地上で「如月くん？」「如月くんがどうしたの？」といった桐についてのささやきが聞こえる。

「ってか私の目を離れたすきに」

「だって私もビックリしたもん」

「でそれで即OKする柚奈もビックリ」

「あれはなんていうか無意識に・・・」

「ふーん」

美依はにんまりと笑う。

顔が真っ赤になっている柚奈を見て美依は強くバシンと柚奈の肩を叩く。

「カップル成立おめでとさんッ」

「こら！消灯時間過ぎてるわよ！」

とたんに布団の向こう側でA組の女の先生の声が聞こえたかと思う

と、電気が消えたようで布団の中はさらに真っ暗になって何も見えなくなった。

美依は柚奈に「Good night.」とささやいて、自分の布団へと戻って行った。

柚奈も美依に返事を返し、自分の布団を整えて横になった。

まだ顔は赤く、熱い。

柚奈は詰まっていた息を出すように、熱い吐息を吐いた。

「すーげー!」

「おおー高ーい!」

京都の清水の舞台で有名な清水寺。

今日は昨日に引き続いて青く澄み渡る晴天。

絶好の研修日和だ。

初めて見る清水の舞台に、身を乗り出していい景色を見ようとする美依を聖斗と蓮が慌てて引き戻す。

「オイオイ、清水の舞台から誤って落下なんて冗談になんねーぞ」

「でも清水の舞台から自殺しようと思って飛び降りた人の生存率85.4%って意外に高いよ。飛び降りても大丈夫じゃない? 蓮」

「え、何で俺? え、ちょ聖斗何その目。ちょっとーみんなー笑えねえーよおー」

蓮がハハハと笑いながら聖斗と美依の背中をバシッと叩く。その様子を笑って眺めながら、柚奈は横目でちらつと桐を見た。いつもどおり桐は横で半分呆れながらも面白そうに様子を眺めている。

昨日の出来事ははたして夢だったのだろうか。

朝、少し緊張しながら朝食の時顔を合わせたが桐はいたって普通すぎるぐらいに普通だった。

むしろ低血圧なのかテンションが低いほどだった。夢か？夢だったのか？

「じゃ、みんなで写真撮ろうよ！」

「カメラないし、携帯で撮りましょうか」

「じゃあ、俺が撮るよ」

「あとでちゃんと交替して桐もちゃんと写るんだよ！」

あーはいはいと桐はだるそうにポケットから携帯を取り出した。

柚奈は美依の手招きに急いで清水の舞台の方へ駆け出したが、その時柚奈は桐の携帯に目がとまった。

黒いシンプルな傷一つない日光で反射するほどの艶めく本体に、キラとぶらさがるプレートのキーホルダー。

「はいッチー……」

「あ、もう押しちゃった」

「ちょっと桐!」

悪い悪いと絶対に自分が悪いとは思ってなさそうな表情で笑いながら、怒る美依の頭をなでる桐。

昨日のあれは………夢じゃない!

とは言ったものの。

あれから全くそれらしき行動も言動も見えず。

あっちゅーまに京都研修は幕を閉じようとしていた。

バスの一番後ろの席は、行きに比べてかなり静かになっていた。

奥では蓮が小さな可愛いいびきをたてて眠りについており、聖斗はそんな蓮に自分の上着をかけてあげていた。

そんな聖斗の姿を見て、頬を赤らめる美依を柚奈は見逃さなかった。

「美依ちゃんったらロククオンですか?」

「もー何言って」

バシッと強烈な一撃が柚奈にヒットする。

美依は顔を赤らめてそっぽを向いてしまったが、柚奈は結構痛くて苦笑しながら肩をさすった。

そんな中と隣を見ると、桐は何故かうつむいていた。

「桐?」

桐の顔をのぞくと、前髪で隠れて見えなかったが桐はすやすやと寝息をたてて眠っていた。

その綺麗な寝顔に、思わず柚奈は微笑む。

「やべ、写メとつたる」

「柚奈ったら」

シャランという携帯のシャッター音と同時にまぶしいフラッシュが桐へ放たれる。

桐はその光に気付いたのかうつらうつらとしながら目を開けた。

「・・・何か今、光」

「あ、そついえばさあ」

わざとらしく、それでもつてにんまりと微笑みながら柚奈はとつさに話題を変える。

桐はやはり眠いのか問い詰める事もなく柚奈の話をつつらな目で聞いている。

「アンサンブルはどうなったんだろう？」

「あ、それなら富山先生が風邪で来られなかったのと、集合が遅れて時間がおしてるのとで無くなっただらしいよ」

「へーえ。ま、どうでもいいけどね」

「私、せっかくバイオリン持ってきたのになーあ」

美依はぷうと頬を膨らます。

柚奈はそのとき、隣で桐が自分の右手を開いたり握ったりしている

のに気付いた。

「どしたの？」

「や……別に」

桐はふいとそっぽを向いて、聖斗の肩に頭をのつけて再び眠り始めた。

聖斗は何も言わずやさしく微笑み、桐のはだけかけた上着をちゃんと戻してやっていた。

その様子を、美依はまたもや頬を赤らめて見ている。

「美依ちゃん？」

「何でもないよッ」

再び強烈な一撃が柚奈の左肩にヒットする。

これは美依の恋のキューピットになってやらねばな、と柚奈は微笑んだ。

第15話

カップル判明

「今日からまた平凡な日々に戻り。ああ、あの日の感動は一体どこへ・・・」

「何か言ってるよこの人」

早々に弁当を食べ終えた蓮が、窓の外に向かったそがれている。特にリアクションをしてやるでもなく、桐は弁当を食べながら言った。

五人しかいない昼休みの教室は、運動場や中庭から楽しそうな声が聞こえる。

ほとんどの生徒が食堂や中庭などで弁当を食べる中、桐が外は断固面倒くさいと言うのでいつも五人は決まって教室で昼食を済ませる。研修も終わった今、本格的に授業が始まってきている。

もう5月に入ったのだから当然なのだが、蓮はぶつぶつと文句を言っている。

「あの日の感動って、そんなに京都研修楽しかった？私はいろいろと疲れたよ」

「あらー、ホントに？」

美依がにひつと卑しい笑みを浮かべて柚奈に囁く。柚奈には一瞬で美依の言いたい事がわかった。

「忘れられない出来事があつたと存じておりますが」

「さーて次の授業は現国だっけか？」

大きな声で美依の言葉をかきけしながら、柚奈は机の中から教科書とノートを取り出した。

むふふと隣で美依がにやけているのを無視して、聞こえていないかと桐の方を伺う。

桐はさつきと同じように弁当を食べ進めていた。

何だ。聞こえてない。

柚奈はホツとし、そしてどこかそれに物憂げな気持ちになった。

桐がお揃いのキーホルダーを携帯に付けているのはあれから幾度となく目にしているからあれが夢ではない事がわかる。

だが、あれから本ツ当に何の進展もない。

研修に行く前と全く同じ日々があれから一週間過ぎていた。

まあ、別に構わないのだがよくわからない。

他のカップルもこんな感じなのだろうか？

そもそも柚奈は未だに桐とカップルという感じがしない。

それ以前に、告白を承諾したものの、自分が桐を好きなのかどうかわからない。

正直に言うと、好きではあるがまだ恋愛感情は無いのかもしれないじゃあなんでOKしたんだ、と自分に問いかけながら柚奈はパックのジュースを飲む。

何なんだろうなあ、と柚奈は思いながら桐の綺麗な横顔を見つめた。

「今なんと？」

「だから」

桐の家のリビングで、いつものようにソファにだらしなく寝転がる蓮と、反対側のソファで行儀よく腰掛けていた聖斗が思わず聞き返した。

いつものように、と行っても3人とも部活で遅くなる為ほとんどこうして桐の家に寄る日は無い。

だが、職員会議で部活が無くなったこの日は久しぶりに桐の家で放課後を過ごしていた。

キッチンでお茶を入れている桐は、特に恥じらいもためらいもせずさらりと言う。

「柚奈と付き合ってる」

「いつから?」

「京都研修」

「いつまで?」

「知るかよ」

蓮は驚愕して啞然としてこちらを見ていた。

すると、意外にも聖斗は桐の出した紅茶を物静かに受け取って口をつけた。

冷静な聖斗を見て、思わず桐は問う。

「柚奈から聞いてたのか?」

「あ、いえ。でも、研修のときからお揃いの携帯ストラップつけて

るなーとは思ってたんで」

「嘘お！俺、全然気づいてなかった！」

「はい。蓮は絶対気付いてないな、と思ってました」

「オイ、わかってたんなら言えよ！！てか桐も何で一週間経って言うんだよ！！」

「忘れてた」

「はああああ？」

ただ一人取り乱している蓮はじたばたとソファの上で暴れる。

ホコリが舞う、と言って桐は蓮の上にどすんと腰掛けた。

「忘れてたって、ありえねえ。俺等親友じゃなかったのかよお」

「でも、この一週間見てて、二人共すごい普通だったんで付き合ってるかどうか確信が持てませんでした」

「だね」

「だね、って何だよ。もっとデートとか・・・てか今日せっかく部活なかったのに君という奴は！！」

「デートとか言われても、よくわかんねーし」

そう言っつて桐はバスケットをかじる。

聖斗はいつもより口数の少ない桐を見て、戸惑っているのではない

かと思った。

そう思うと、何故か微笑んでいた。

「どちらからなんですか？」

「……何が」

「告白したの」

はっ、とわかりやすく蓮は息を呑んだ。

急に部屋に訪れた沈黙に、聖斗は究極の笑みで桐を見つめている。

「……お前にしては唐突だな」

「親友なんですから聞きたい事はずばつと聞きます」

「あの桐が告白とか考えられねえ。かといって、柚奈も想像できねえし」

蓮のお喋りな口にビスケットを三枚突っ込む。

ふごっ、とむせた蓮が起き上がろうとするがまだ背中には桐が腰掛けていた。

「俺」

「えーーーーー!!」

「意外ですね。でも、そうでもないか」

再びじたばたしはじめた蓮を、押さえつける。

それを聖斗が微笑んでみている。

「じゃ、デートに誘わないといけませんね」

「は？」

「だって、告白したのが桐なのに、デートにも誘わないっておかしいじゃないですか」

それはわかっていた。

デートをすればいいというのはわかっていたのだが、正直そんな事言われても経験がないのだから何をどうすればいいのかわからない。桐はため息をついた。

「すごく女子にモテるのに、そういう事は無知なんだから」

「お前もだろ」

「僕は違いますよ。カフェでも行って一時間ぐらい喋って、ウィンドウショッピングでもして映画とか」

「・・・・・・。」

桐が無言になるのを、聖斗は楽しそうに微笑む。

カフェに行くとして、一時間も何を喋る？

正直言えば、柚奈と二人きりになった事はあまりない。

話が見つのだろうか、とふと不安になった。

聖斗ならあの紳士の巧みな話術でいくらでも話がもつのだろう。

次にウィンドウショッピングに行くとして、盛り上がるだろうか。

柚奈が、あれが欲しいこれが欲しい、あれが可愛いこれが可愛い、

などと言うような人だとは思えない。

映画に行くとして……映画か。

特に喋らなくてもいいし、何も気にする事なくただ映画を見ていればいいだけだ。

「お前はいつもデートでどこ行ってるの？」

自分の下敷きになっている蓮に尋ねる。

蓮はビスケットを口にくわえながら、桐を見上げた。

「え、あ。俺？」

「えッ、蓮って彼女いるの?!」

朝、美依が教室で叫ぶ。

幸い、朝早かったので教室には柚奈達五人の他には男子が一人しかいなかった。

女子がいたら、大騒ぎになっていただろうと柚奈は想像する。

柚奈も聞いていなかった驚きの事実、目を丸くした。

「あれ、言っ
てなかったか」

「言っ
てなかったよ!!」

「まあでも、三人共こんなにモテてるのに彼女いないっておかしい

もんね」

「三人共っというか・・・桐はもうご存知の通りですけど」

聖斗の言葉に、思わぬところで墓穴を掘ったと柚奈は後悔した。
しかし、墓穴を掘るといふ表現もおかしい。

第一、それは事実だし、何を隠す必要がある？

それでもおそろおそろ桐の方を見ると、別にどうも思っていないさそうで普通に話の行方を見守っていた。

何なのよ。

不満げに柚奈が桐を睨んだとき、ふと桐と目があった。
柚奈は目をそらす。

大体、こいつは本当に自分の事が好きなのだろうか？
わからない。

「えっ、誰?!」

「言っても絶対知らないぜ？また機会があつたら紹介するってば」

蓮ははは、と笑ってそれ以上何も言わない。

「蓮って意外に純粋な青年かと思っただけど、見た目通りプレイボーイなわけ？」

「ちげーよ！俺は莉莉衣一筋だから！」

とたんにその場がシーンとなる。
思わず美依がにやりと笑う。

「リリイさんですか。確かに知らないですね」

「てめえ、このやろツ」

蓮と美依がきやあきやあ言つて教室を駆け回るのを、聖斗が保護者のように微笑ましく眺めている。

三人仲いいから普通にみんなしてずっといなかったのかと思ってたけど、蓮だけ彼女いたんだなあ、と柚奈は蓮を見て意外に思う。でも、一筋なのは蓮らしい。

「柚奈」

ふと、後ろを振り向く。

何故か輪から離れて、そしてどこか戸惑いがちにこちらを見ている。よくわからないが、とりあえず桐に歩み寄った。

「明日空いてる？」

明日と言えば土曜日だ。

特に習い事も塾も行っていない柚奈はそのまま返事を返した。

「あいてるけど……あつ」

「何？」

柚奈はふと、思い出した。

この前からずっと、和音と和葉が服のサイズが合わなくなったとか靴が小さくなったとかうるさいので、明日買いに行くと書いていたのだった。

けれど買い物はそういえば午前中行くと言っていた気がする。

「あ、いや何でもない」

「そう」

それがどうした、ときよとんと桐を見つめる柚奈を、桐は少々困惑した顔で見ていた。

だが、程なくして言葉は返ってきた。

「じゃ、昼の１２時に迎えに行く」

「は？」

思わず聞き返してしまった。

しかし、桐はそれだけ言って輪の中へ戻って行った。

柚奈は未だは？の余韻を残したまま、桐の背中を眉間にシワを寄せて見つめる。

迎えに行く？

誰を。

私を？

何で。

その時柚奈はハツとした。

もしやコレが・・・・・・・・・・

「それはデートだよ!!!」

当の本人よりも美依の方が嬉々として喜んでいる。

柚奈はと言うと、嬉しさよりも付き合ってたんだな—という実感がわいてくる感じだった。

しかし、最近の妙な不安が一気に消えて、柚奈は微笑んだ。

「オシャレして行くんだよ？」

「あつたりつまえー」

柚奈は無邪気に笑った。

ましてや、そのデートがなくなるなんて思いもしないで。

第16話

暗雲ロソリネス

「起きてったら」

「んー・・・」

「姉さん」

「・・・む・・・」

寝ぼけている時ではさすがの柚奈でも、今聞こえた二つの声が別の人物だとはわからない。

和音と和葉は時間になっても起きない姉を起こしに来たのだが、姉を機嫌よく起こすのは至難の業だ。

もしも下手して姉の機嫌を損ねてしまったら、その末路は想像したくもない程に恐ろしい。

それでも思わず想像してしまうこの双子の脳裏には、同じ地獄絵図が描かれていた。

「これでいきますか？」

「よし」

今朝の朝ごはんにあった唐揚げを姉の顔の近くに持っていく。すると、うつすらと姉が目を開かせた。

「・・・美味しい匂い」

「ほら、美味しい朝食が姉さんを待ってるよ」

姉は無言でのっそりと起き上がる。

よし、と双子は同時にガッツポーズをして任務の成功を喜んだ。

そして姉がベッドに座ったまま唐揚げを口に入れるのを見て、再び寝ないようにと和音が念を押す。

「誠に申し上げにくいんですけど、今日のお約束を覚えていらっしやいますでしょうか」

「約束？ああ、買い物でしょ？」

「僕達二人とも午後の三時から部活があるので、なるべく午後にずらしてもらいたくないんですが」

「別にずらさなくてもいいじゃん」

「時計をご覧になって下さい」

「何よ」

そう言つて、和葉が横からすつと差し出した時計は、ぴったり11時を差していた。

うつろだった柚奈の目が、ぱちくりと開かれる。

「えーーーーー!!!!!!」

姉の叫びに弟は二人並んで冷静に耳を塞ぐ。

柚奈は飛び起き、クローゼットを勢いよく開いた。

「ちよつ、あと1時間しかないじゃん!!」

「姉さん、わかってる？俺等もう靴に足入らないんだって」

「ちよつと悪いけどそれは明日に」

「サンダルで部活に行けって？」

同じ顔が二つ、柚奈を見つめている。

先週からずっと靴の事は言われていたのだが、京都研修から帰宅した直後だったので来週まで待つてくれと言った。

疲れている姉を見て渋々承諾し、そしてキツイ運動靴で今週はなんとか部活を乗り切ったと言うが、もう限界らしい。

どれだけ成長速いんだよって話だが、それは自然の摂理であり仕方が無い。

「先週からずっと我慢してたのに」

「してたのに」

「また延期ですか？」

「ですか？」

よくこの双子は姉を責める際にこの手を使う。

同じ顔が同じ事を連呼すれば、姉の心は確実に苛まれていく。

双子は無表情で姉に訴えた。

そして、柚奈は折れた。

玄関の扉に手をかけた瞬間、ふと気付いた。
そういえば、柚奈の家を知らない。

自分らしくない、と前髪をかきあげる。

もう約束の時間まで30分を切っている。

美依なら柚奈の家を知っているだろうと、場合によってはそこまで送ってきてくれるかもしれないと慌ててメールする。

靴を脱いでリビングに戻り、美依からの連絡を待っていると、すぐにメールの受信音になる。

急いで開くと、それは美依からではなく、柚奈からのメールだった。

本当、ごめん。

急用が入った。

明日じゃダメ？

今どきの女子らしくない絵文字無しのメール。

しかし、まあそれも柚奈らしいし、もしかすると単に急いでいただけなのかもしれない。

急に気が抜け、了解のメールを送る。

予定が空いてしまったな。

そういえば、今日は蓮と聖斗が服を買いに行くと言っていた。
今からでも間に合うだろうか、と二人に桐はメールを打った。

「これなんかいいじゃん！」

「俺は赤がいい」

「同感」

「ちょっとお姉さんのセンスに文句つけないでくれる！」

黄色のＴシャツを握って離さない柚奈と、赤いＴシャツに持ちかえさせようとする和音と、隣でパーカーを物色する和葉がいた。結局、桐とのデートを断って弟の買い物に行く事になった。

最近どんどん成長していく弟の衣服は、半年に１回は買い換えなければならぬ。

この調子だと、高校に入るところには身長は１８０ぐらいいくのだろうなあ、と柚奈は弟を見上げる。

「俺、向こうでジーンズ見てくる」

「了解。姉さんは俺に任せて」

「どついう意味よ」

和葉はこのままでは部活に遅れると思ったのか、とりあえずＴシャツは和音に任せてジーンズコーナーへと向かった。

この双子が衣服なんかを共有する理由は、スリーサイズが同じだという事と、好みが全く同じだという事にある。

自分が好きなものを買えば、相方もそれが好きなのだ。

この世の双子がみんなそういうわけではないのだが、この双子は名前以外は全て同じに思えるほど全てが一緒だ。

「黄色つて目立つじゃん。こっちの赤と黒のやつが絶対いいって」

おまけにこの双子は顔がいい。

背も高いし体格もいいし、大きな瞳に長い睫毛、通った鼻筋に二キビもシミもない綺麗な肌。

柚奈も異性には好かれるが、弟のモテようとは比べものにならない。しかし、だからなのか弟はそれ以上目立つ事を好まない。

「目立つてなんぼ！」

「拒否」

で和音と二人言い合っているTシャツコーナーの裏側、ジャージのコーナーに見た事のある3人がいた。

だが、お互いにまだ全く気づいていない。

「休日とかさ、寝て起きてそのまま着替えずにごろごろ過ごしてちよつくら外に買い物に行っても変じゃないジャージが欲しいんだよね」

「着替えりゃいいじゃねーか」

「僕も同意見です」

「だから、その手間が省ける魔法のジャージを・・・」

「俺、Ｔシャツ見てくる」

「僕も」

「ちよつとちよつとお待ちなさい！お２人さん！」

さつさと歩いて行ってしまう桐と聖斗を慌てて蓮が追いかける。

隣で聖斗が笑う中「薄情者！」と蓮はわざと泣きべそをかいている。阿呆かと一喝して、さつさとＴシャツコーナーへ行こうと角を曲がろうとしたとき、ふと覚えのある声が聞こえてきた。

「だって赤も黒も持つてるじゃん」

「えー」

突然足をとめた桐に、並んで歩いていた聖斗は不思議そうに立ち止まったが、後ろにいた蓮は思い切りぶつかった。

そのせいで前のめりに倒れそうになったが、桐は必死に持ちこたえた。

「どうかしましたか？」

「・・・ 柚奈がいる」

「えっ、嘘」

三人は見つからないようにそつと商品棚の陰から顔を出した。そこには確かに柚奈の姿があった。

「あれ、急用でデート中止になったんじゃないの？」

「蓮」

聖斗が蓮を叩いて制する。

蓮はやば、と言う顔をしたが桐はそれどころじゃなかった。

柚奈の隣に見知らぬ男が立っていた。

「すごいカッコいいんだから何も恥じる事はないさ。目立てばいいじゃん」

「別に何も恥じてないから」

柚奈の碎けた話し方に、桐は目を見開いた。

最初会った時と今では柚奈も桐達に随分と打ち解けているが、同じように打ち解けている男が他にいるなんて思いもなかった。

それに気になったのはその男の容姿だった。

桐と同じか少し低いくらいのすらりと高い身長に、筋肉もついているよつで体格がいい。

そして、桐も目を見張るほどの美形だった。

テレビで歌って踊るそこらのアイドル何かよりもよっぽどその美貌は秀でていた。

現に柚奈も「カッコいい」と言っている。

「あの男、オーラがすごくない？」

「ですね。かなりモテそうな人に見えますけど……」

聖斗がちらりと桐を見たのに、桐は気付いた。

「ですね」

桐の言葉に苛立ちがこもっていたのはあきらかだった。
聖斗と蓮は顔を見合わせる。

「桐も男前だつて」

「どーも」

正直言うと、自分がそれなりに良い容姿をしている事は知っている。
そして自分と同じくらいに蓮と聖斗は女子に人気がある。
いつも3人でいたし、3人共性格は全く違い、3人それぞれの良い
ところがあるとわかつていたので互いに羨む事も嫉妬する事もな
かった。

だが、あの柚奈の隣にいる男は違う。

柚奈が碎けた話をするほど仲がいいという事は、あの男は性格も良
く話しやすいという事だ。

そしてなにより男である桐までも惚れ惚れするような完璧な容姿。
すると、桐は男の胸元に目がいった。

シルバーのスティック型のネックレス。

それは、紛れもなく柚奈が修学旅行のお土産で買っていたペアネッ
クレスの一つだった。

「ちょっとジーンズも見てくるね」

「うん」

そう言って柚奈は桐達のいる方とは反対方向の通路へ行ってしまった。

男は一人で、さっきまで柚奈が男に見立てていたＴシャツを手にしている。

どうやら気持ちが揺らいでいるようだ。

すると、男が不意にこちらを見た。

じっと見つめていたので、ばつちり目が合ってしまった。

「何か？」

この男、意外にも鋭いようで桐に問う。

聖斗と蓮が緊張する面持ちの中で、桐は怯まぬよう拳を握りしめて言った。

「柚奈とは・・・どういう関係で？」

男は少し意外そうな顔をしていた。

もう少し違った質問を予想していたのだろうか。

しかし、男はしっかりしているようで至って冷静沈着だ。

そして少しばかり考えたのち、何故か悪戯に微笑む。

「友達以上・・・恋人以上？」

恋人以上？

桐の中で何かがぷつんと切れた。

その表情には憤怒も嫌悪も無く、青ざめたような顔をしていた。

「帰る」

「桐！」

「待てって桐！」

そういう女だとは思わなかった。

誠実で、容姿に惑わされず、誰にも染められない純真無垢であり、けれどシビアな一面も持つ柚奈を、彼女のような人は他にいないと思った。

しかし、人間は賢い。

今までも女子に騙されかけた事は数度あった。

何故か桐を好く女子は熱狂的な人が多く、変にずるがしこい人が多かった。

最初は桐に全く興味が無いふりをして、自然に話しかける。

桐はほとんどの女子が自分の事を見た目で判断すると思っているし、事実そうだと思う。

だから、見た目で判断されないと桐は表には出さないが嬉しいと感じる。

そしてどこかその女子は変わっていて、そう、漫画の主人公のように人を見た目で判断しないような人に見えた。

だが、それも全部演技だったのだ。

それを知ってしまった桐は、失望した。

女子はみんなそういう奴なんだと。

そんな女子を最初に演じてくる人は少なくなかった。

それでも桐は信じる事は無く、だから桐はこれまでに誰とも付き合った事はなかった。

でも柚奈は違うように思えた。

桐に興味が無いように演じる女子は多かったが、桐の事を嫌うような素振りを見せるのは柚奈が初めてだった。

それに、英語やフランス語が堪能なところも少し自分と似ているようで親近感を持った。

でも最終的には本当に、何となくだった。

柚奈の雰囲気が好きだった。

それだけだった。

それだけだったのに。

結局、みんな見た目なのか。

桐は全てに失望した。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4384k/>

シャイニング・クインテット

2010年10月14日17時48分発行